

弘道

第947号

『真理と信仰』……………鈴木 勲

銷夏特集 私の愛読書

『平家物語』など……………神戸光子
私の愛読書……………田邊彌太郎
私の愛読書『古事記』……………笈 泰彦
雑誌の五十年……………有田一寿
少年時代の読書についての思い出……………福地重孝
初秋の読書のために……………土田健次郎
学生社刊『アメリカの心』……………小谷隆一
国木田獨歩『武蔵野』……………古川清彦
『渋沢栄一伝記資料』を読む……………小野健知

平成2年 7~8月号

東京
日本弘道会

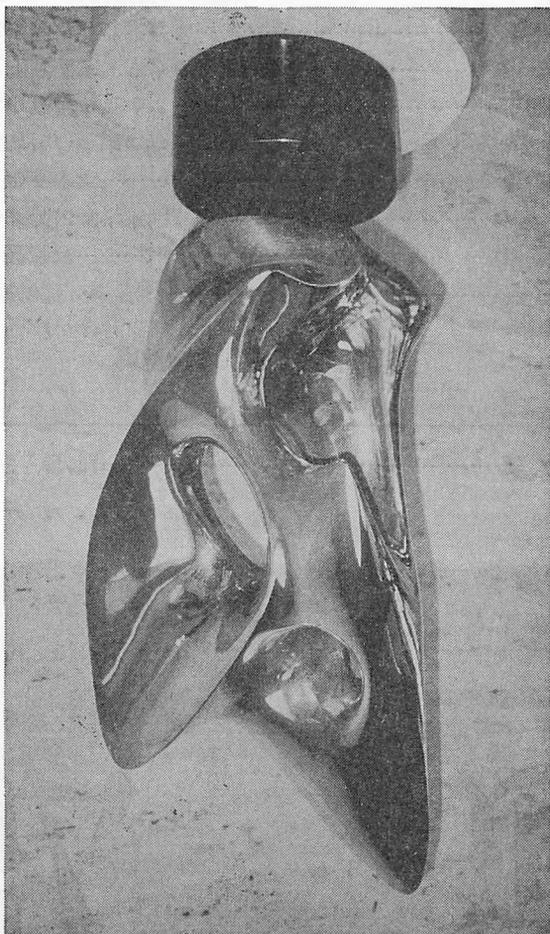
日本弘道会ビルの昭和60年1月の竣工後、玄関・エントランスの一角に、アントワーン・ボンゼ作「AMOROS」(愛)が置かれています。

ボンゼは、浮世絵などの影響で知られているジヤポニスム(日本趣味)の画家、モーリス・ドニを祖父とし、1928年パリに生まれました。14歳の時にはじめて彫刻を学び、成人しからは彫刻家ジヤン・フルネに師事し多くの影響を受け、独自の芸術観を定めていきました。

東洋の幽玄を見ようとした祖父の血をうけてか、彼の作品にはしばしば無形であるはずの愛や夢が形造られています。本作品の鑄造による滑らかなフォルムにも、外界へ無限に拡がる愛が寓がられているようです。

1983年制作 フロンス 高さ 約60cm

アントワーン・ボンゼ作「AMOROS」(愛)



日本弘道会綱領 (昭五一・一〇・三〇)

甲 号 (個人道徳)

皇室を敬愛すること、国法を守ること
信教は自由なること、迷信は排除すること
思考を合理的にすること、情操を美しくすること
学問を勉めること、職務を励むこと
教養を豊かにすること、見識を養うこと
財物を貪らないこと、金銭に清廉なること
家庭の訓育を重んずること、近親相親しむこと
一善一徳を積むこと、非理非行に屈しないこと
健康に留意すること、天寿を期すること
信義を以て交わること、誠を以て身を貫くこと

乙 号 (社会道徳)

世界の形勢を察すること、国家人類の将来をおもんばかること
政治の道義性を高揚すること、経済の倫理性を強調すること
自然の美と恩沢を尊重すること、資源の保存と開発を図ること
教育の適正を期すること、道義の一般的関心を促すこと
報道言論の公正を求めること、社会悪に対し世論を高めること

会祖西村茂樹先生小伝



日本弘道会の会祖・西村茂樹先生は、明治六年森有礼・福沢諭吉・西周・加藤弘之・中村正直らと相図り「明六社」を設立。『明六雜誌』を発行して、開化思想、自由思想の啓蒙運動を精力的に展開いたしました。

その後明治九年三月には、国民の道義向上を目指し、さらに国家社会の基礎を強固にするための道徳教化団体として、「東京修身学社」を創設しました。これが現在の「日本弘道会」の前身であります。明治十九年には『日本道徳論』を公にして、当時、西欧の模倣と追隨に終始していた社会の風潮と政治の在り方を厳しく批判し、日本道徳の確立を訴えました。

西村茂樹先生は、明治時代における卓越した道徳学者であり、同時に偉大な国民道徳の実践家でもあります。明治二十六年、宮中顧問官を除くすべての官職を辞して野に下り、全国を行程して社会道徳の高揚に一身を捧げ、今日の生涯教育の先駆的役割を果たされました。

目次

第九四七号(平成二年七・八月号)

表紙裏 アントワーン・ボンセ作「愛」(フロンズ)

(泊翁先生訓)

「砲術は末なり、洋学は本なり」……………(4)

【巻頭の言葉】

『真理と信仰』……………鈴木 勲……………(6)

— ** —

特集 私の愛読書

『平家物語』など……………神戸光子……………(10)

私の愛読書……………田邊彌太郎……………(11)

私の愛読書『古事記』……………寛 泰彦……………(14)

雑誌の五十年……………有田一寿……………(18)

少年時代の読書についての思い出……………福地重孝……………(21)

初秋の読書のために……………土田健次郎……………(24)

学生社刊『アメリカの心』……………小谷隆一……………(27)

国木田獨歩『武蔵野』……………古川清彦……………(30)
 『渋沢栄一伝記資料』を読む……………小野健知……………(32)

— * * * —

【随想】

一冊の画集……………細谷俊夫……………(36)
 〔北斗星〕……………澤英武……………(37)

もったいないと思う気持ち……………杉浦昌也……………(38)
 〔熟年からの健康〕……………

胸痛……………

【泊翁百話】

泊翁日記(四)……………古川哲史……………(39)
 明治三十一年の一月一日より七月三十一日まで……………

弘道俳壇……………	篠塚しげる選……………(49)
-----------	-----------------

支会だより(安房支会)……………(50)
 事務局往来……………(51)
 会告(ご寄付者芳名、会費領収報告、新入会員芳名)……………(53)
 言葉のひろば(北原隆、高梨武夫、岩崎晶)……………(54)
 編集後記……………

先 生 訓

「砲術は末なり、洋学は本なり」

私は、幼時からもっぱら儒教を学んでいたのので、儒教以外には天下に道はないと思っていた。十四、五歳のとき、水戸藩の大日本史と頼山陽の日本外史を読んでわが国の古代をたいへんあこがれるようになり、儒教をわが国に用いるためには、わが国の歴史と対照させて、多少取捨選択をしなくてはいけないことを知った。二十歳ばかりのとき、水戸藩儒会沢正志斎の『新論』がはじめて公刊された。この『新論』の説は、私がかつて希望したところにピッタリであったので、深くこれを信じた。(ただし、その中に言っている、ヨーロッパは世界の足であるから、いつも四方に走りまわり、アメリカは背中であるから、至って愚かであるといった説などは、はじめから信じなかった)。

佐久間象山の門に入って砲術を学ぶに及んで、象山先生は私に「砲術は末で、洋学が本であるから、きみは洋学を学ぶべきである。自分(象山の自称)は、三十二歳のとき、はじめてオランダの書物を学んだ。きみは私が学んだ年代にくらべると、一段と年が若い。かならず志をたてて洋学につとめるがよい」とはげました。このすすめを受けて私は思った。「私はいま西洋の砲術を

泊 翁

学ぶといつても、目的は夷狄をはらい祖国を護持することにある。だから砲術を学べば目的は達するので、べつに洋書を読む必要はない。道徳や政治のことなら、東洋の教は西洋の教にまさっているであらう」と。

そのようなわけで、はじめは象山先生の言われることに賛成しなかったが、のちに思いなおしてよく考え象山先生の言に道理があることを知り、それより亡友木村士約(軍太郎)を師としてオランダ語の習得にあたった。しかし、持病の眼病が全治せず、また家督をついだあとは藩の官務が多忙となったため、力をオランダ学の習得に集中することができなかった。しかし、今日こんにちになって西洋の書物を読み、西洋の道理の一端に通ずることができたのは、象山先生と亡友木村士約のおかげである。

(『往事録』の「茂樹履歴」の一節)

【巻頭の言葉】

『真理と信仰』

社団法人 日本弘道会会長 鈴木 勲

内村鑑三の弟子で、山形県小国町の基督教独立学園高校の創立者、鈴木弼美^{すけよし}先生が、五月二十六日なくなられた。八十八歳の一昨年まで同校の校長だった。

今年頂いた賀状には、「昨年のクリスマスは平和の希望を与えられて迎えることができ感謝にたえません」という書出しで、「世界がマルクスに騙されて唯物論、無神論を科学的と思つて来た。……戦争、一党独裁、弾圧という暴力政治が行われて来た。……自分の主張を通してために暴力を用いるのはその主張が誤っていることを示す。……東欧諸国ではマルクスの無神論から来る暴力政治に耐えきれなくなって、これを排除したので平和の兆しが見えた。これは喜ばしいことである」と書いておられる。

鈴木先生から頂いた『真理と信仰』を改めて読んでみる。

「マルクス主義の利と害」と題して、マルクス主義の悪い点の第一に暴力主義を掲げ、暴力によらなければ理想を達成できないというのはそれが真理であるという信念が足りないからである。と述べ、マルクスの力は今後百年か二百年の間で衰えて行く、と予言しておられる。今から三十五年前のことだが、先生の見通しよりかくも早くイデオロギーの終焉を目の当りにして、さぞかし喜んでおられたことと思う。

『真理と信仰』は、鈴木先生の文章や講演を学園の教師達がまとめたものだが、その序言に次のように書いておられる。

「内村先生のなさった偉いことの一つは、真理としてのキリスト教の確立である。キリスト教は真理なるが故に信ずる。真理とキリスト教とどちらを取るかと言へば真理をとると言うのである。……私も内村先生の驥尾に付して、このことを確かにしようとして努力して来た」

西村茂樹先生が『日本道徳論』において、日本の道徳の基礎とせんとするものは真理であり、真理の外には天地間に一も完全無欠なるものはない。真理は事実を基としており、事物の事実に向合ふものは尽く真理であり、事実に向合ざるものは真理でない、と述べておられる考え方は、「事実を基とする信仰」を説く鈴木先生の考え方と共通するものがあるように思われる。

内村鑑三の教えを守って、昭和九年、雪深い小国の山奥の叶水に基督教独立学校を創立し、戦後新制高校に切り替え、日本で最小の高校としてユニークな教育を続けてきた教育者としての鈴木先生の信念も、この真理に対する信仰を基としている。

「教育とは、真理を愛することを身で以て教えることである」

「学問を教えてほんとの知育をして真理を愛することを身につけさせて、嘘やごまかしを嫌うようにするのが真の道徳教育である」

「日教組が一日ストをするのも問題であるが、ほんとの教育を放棄して受験教育をするのは毎日ストをしているようなものである。それ故、何をおいても受験教育をやめさせなければならぬ」

長靴姿で飄然と現われ熱情をこめて語られた先生の音容今や遠し。心からご冥福を祈る。

(本会会長・日本育英会理事)

特集

私の愛読書

良書は、私どもの師であり、友であります。また、読書は、心の糧となり、人の心を育み、心の眼を開かせてくれます。

本号を例年の通り銷夏号とし、「私の愛読書」というテーマを設定したところ、多くの方々から玉稿をお寄せいただきました。

『平家物語』など

神 戸 光 子

夏の陽も漸く暮れて、庭面に宵やみの迫る頃は、暑さも消え、軒の端の月影にたゆとう蚊やりの煙を、心ありげに払うと、和歌にも詠まれた涼風も立って、誠に夏の夜の風情は、云い古された事ながら、この上ないものでございます。

手許の物語などを繕くのも、このような折でございます。物語と申しましても、たとえば、世に知られる源氏物語は、遙か後世の人びとの心を、今なお魅了しておりますし、又歴史物語と呼ばれて、その時代の移り変りを述べた『栄花物語』『大鏡』などは、世上の有様を彷彿させて、読み飽きないものでございます。

又、戦乱を中心として述べた『太平記』『保元物語』などは、戦記物と呼ばれるにふさわしく、勇壮活潑の筆致でございますが、その他のものの中には、読み進むにつれ、その時代の人びとが、打ち続く合戦の世にあって、やむなくこうした時代の波にもてあそばされ、栄えるにつけ、衰え滅びるにつけ、それぞれの身の上にかかりかかる思わぬ栄枯

盛衰の変転の中に、生きて行くことを余儀なくされ、その嘆きの思いが、心に迫って来るような物語もございます。

中にも『平家物語』は、ご承知の通り、信濃前司行長の作と云われ、かの冒頭の有名な「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりを顯す、奢れる者久しからず、只、春の夜の夢のごとし云云」の文章に見られる通り、その筆先には、常に仏教の因果の教えと、無常觀の思いがこめられ、又、後世に平曲として琵琶語りによって、語りつがれた程の、美しい文章の数々は、もはや物語と云うより、詩と呼ぶにふさわしい趣きのあるものと云われております。

平氏の栄華から没落に到る迄の、長い間にわたるこの一大叙事詩は、やがて最後の灌頂巻を以て、あえかにも美しく、その終りを告げております。

右の灌頂巻の小原御幸の件りの描写は、特に美しく、文治二年、北祭の過ぎた頃、建礼門院の大原の閑居に、後白河法皇の、お忍びの御幸のあったことを述べ、先ず、その

里のあたりの眺めは、遠山にかかる白雲を、散った花になぞらえ、梢の青葉に春の名残を惜しみ、夏草の茂みの末に、一字の御堂を訪ねあて、その庭面の泉水木立とも由ありげに、糸と乱れる青柳、池に漂う錦と見紛う浮草、中島の松にかかる藤の裏紫に、岸の山吹、雲間よりの時鳥の一声も、御幸を待ち顔に云云とさながら一幅の絵のようでございます。

続いてご対面の場で、法皇の仰せに答えて、女院は「昔に変わる今の有様は、只、夢とのみ」と深い嘆きの中にも「戦いの末、平氏は西の海に滅び、御子安德帝をはじめ多くの人々に別れ、やがて世をのがれて、山奥のこの里にわけ入り、峰に木伝う猿の声と賤が爪木の斧の音のほかには、訪れる人も稀ながら、小鹿のわたる足音にも、心おどろく程に世を忍ぶ明け暮れに、昼夜朝夕、亡き人の菩提を弔い、

末は必ず一つ蓮にと思ひ定めて」などと御心のうちを耳にした並みいる人々が、皆袖をしぼるあたりから、やがて女院ご往生へと続くこの巻は、本統に幾度び読み返したことでございましょう。

尚、この物語に、今一つ心をひきつけられますのは、後年、琵琶の伴奏に合わせて語る音曲として、世にひろめられたことでございます。えもいわれぬ物悲しいひびきを持つといわれるそのふしも、己に伝える人もない由で、今更聞かくべくもなく、誠に残念に存じます。

いつの間にか夜も更け、漸く頁を閉ぢようとして、ふと、耳の底に、その平家琵琶の物寂しいひびきが、ひとふし聞えるように思うのも、このような時でございます。

(本会特別会員)

(神戸光子さんは、会祖西村茂樹先生の愛孫。)

私の愛読書

田邊彌太郎

青春時代の私は、小説類よりも修養書(一例「孔子鑑賞」)や趣味(短歌)の本を購入して愛読したので、特に定まっ

た愛読書はない様である。

後、私は島崎藤村(一八七二—一九四三)の詩集や小説類

を読むことに依り、また藤村の生地木曾の馬籠や小諸を訪問するに及び、藤村に対する憧れの心や研究調査の意欲が深まったのである。即ち藤村記念館は中仙道の木曾馬籠の旧本陣跡に建てられている。街道筋の入口正門は黒木の立派な冠木門（かぶきもん）であり、そこを入った正面の白土塀の中央からやや右によった上の方に45センチ角ほどの額をはめ、表面に藤村の筆跡を模した嗣子島崎楠雄氏の文字が三行に書かれている。

血につながるふるさと

心につながるふるさと

言葉につながるふるさと

藤村は初め詩を作り（近代日本詩史の第一人者となった。）次には詩から散文へと進んだ。（詩では『千曲川旅情の歌』など有名。）散文に移るためには、その習作時代（小諸時代）に『千曲川スケッチ』をまとめ、別に多くの短編を書いたが、やがて小説『破戒』を自費出版して、世に出したので、彼は一躍文壇に認められたのである。

藤村は彼のすべての作品の前提とも思える詩集を先に出した。即ち詩こそ散文の原因であると感じられる。藤村は明治三十年（教え26歳）に『若菜集』、同三十一年に『夏草』、同三十四年（教え30歳）に『落梅集』を出して、以後は詩作しなかつた様である。

藤村は詩から小説に転じた。花袋でも独歩でも泡鳴でも、

初めは、若い情熱を詩に注いでいて、次第にそれに物足りないで、視野の広い小説の方へ進んだともいえるので、藤村とても、同様の気持から転換を試みるようになったのであろう。それだけではなく、詩では食えないことを、藤村は痛切に感じていたものであろうと言われている。

藤村の『若菜集』は青春の心をゆすぶった詩が多いが、いちばん新鮮な情感で綴られているのが、「初恋」であるといわれ、しかもこの詩は流麗な七五調の詩である。

初恋

まだあげ初めし前髪の

林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛の

花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたへしは

うすくれなる薄紅の秋の実に

人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの

その髪の毛にかゝるとき

たのしき恋の盃を

君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に

おのづからなる細道は

誰が踏みそめしかたみぞと

問ひたまふこそこひしけれ

恐らくこの詩は馬籠の大黒屋（藤村生家に向つて右隣の家）

の娘おゆふさんと、藤村とは幼な友たちでもあった。後、

藤村が上京した間に、おゆふさんは妻籠の脇本陣であつた

林家へ嫁入りしたという。

次に『落梅集』の中より壮重な感じがする五七調の「千

曲川旅情の歌」の詩を掲げる。なお、この詩からは旅の憂

愁そのものがにじみ出てくる。

千曲川旅情の歌

一

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ

緑なす藪藁は萌えず

若草も藉くによしなし

しろがねの衾の岡辺

日に浴けて淡雪流る

あたたかき光はあれど

野に満つる香も知らず

浅くのみ春は霞みて

麦の色わづかに青し

旅人の群はいくつか

畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず

歌哀し佐久の草笛

千曲川いざよふ波の

岸近き宿にのぼりつ

濁り酒濁れる飲みて

草枕しばし慰む

二

（「二」の詩は割愛す）

昔の小諸城趾——懐古園には藤村記念館、断崖に近い所に藤村詩碑がある。「小諸なる古城のほとり……」の「一」だけの詩である。

小説『破戒』

『破戒』は明治39年3月、藤村に依つて自費出版された。かくて本格的な作家への道を歩み出した訳である。（初版千五百部、十日間で売り切れの見通し）この大作は未曾有の反響を呼んだ訳である。この『破戒』の素材は伊那の新平民生れの大江磯吉という人が東京高師卒で、長野師範の先生

をしていたが、新平民として排斥されたことを、近所の伊東喜知氏から藤村が聞き、改めて文学作品として小説化したものが『破戒』であるという。その作品に就いて少しく述べよう。

『破戒』は普通、主人公瀬川丑松の部落民が、他の社会から蒙る理由のない迫害に対する義憤を、主題にした作品として見られて来ているが、丑松が父の教を裏切つて、苦しむように、詩人藤村自身が、世の教を裏切つて、つまらぬ苦闘をする丑松の破戒ならぬ藤村の破戒こそ、この作品の主題なのではあるまいか、と考えられている。この考えは佐藤春夫の「破戒」評である。（雑誌『文芸』臨時増刊「島崎藤村読本」中に於ける同氏の「破戒」評）

私の愛読書 『古事記』

その一冊の本に出會つた時から、私の生き方が一遍に変わったといふ様な劇的な一冊をもつた経験はない。しかしその書物が、私の歩みとともに一生涯を通じて今日に至るまで深い影響を与へ、手にとるごとに益々その有難味を増し

紙面の都合で、相当書き残しが出来てしまった。即ち各詩集からのほんの一部分と、小説では残念ながら『破戒』だけに留まつた。

藤村の作品を鑑賞して行くと、何か人間島崎藤村というものが、次第に見えて来る感じがする。そこで、藤村は非常に几帳面な人で、簡素を愛する心が強かつたということを書いた。藤村自身で「簡素」の由来とでもいふべきことを書いて居られた。そして、物事処理の順序をたてて計画を進めて行かれたということ、そのためには用意周到、着々準備をせられたということなど、大いに学ぶべき点を残されているのである。

（佐倉支会副会長・歌人・元東京都公立学校長）

寛 泰 彦

つつある本がある。それは『古事記』である。幼時のお囁話的な出會ひに始まり、青少年期には歴史的な興味と知見の対象となり、やがて日本の國や、日本人としての自分の根柢をなす大生命を通じて神を覚らしめ、神ながらの心を

明らかめさせてくれてゐる本が『古事記』なのである。

人間には誰でも両親があり、その両親にも亦両親があるといふわけで、世上の人間をその内部の生命の方面から観れば、あらゆる人といふ人は究極において一大生命に帰一してゐる。その生命は決して定在するものでない。我々にしても絶えず息をして酸素をとり、水を吸ひ、食物を食ふところにあるのであつて、今自分は存在すると思つても息をしなければなくなつてしまふ。大生命も絶えず外物を取り入れこれと融合し、万我万物となるところにアルのである。大生命はそこで万我万物と帰一してゐる。さうした超越的一大生命を日本語ではヒ(靈)と言ひ、その働をムスヒ(産靈)とよんでゐる。日本人は各人の清明心において、さうした大生命を通じて神を拜んでゐる。その様な清明心をもつヒト(人)とは大生命たるヒが、アルトキアルトコロのト(戸・門)を通路として現実界にアレ(生)たところにアル(存・在・有)ものである。普遍的な大生命も亦そこにアルのである。決して天上などに定在してゐるものではない。日本語のアル(存・在・有)はアル(生)と同根の語である。

それ故、この様なヒト(人)は他を以て代へられぬ個々独立の存在ではあるが、決して独立の存在としてのみある

のではなく、大生命たるヒがこの歴史的世界に顯現した國や家といふ人倫を通して実現されるところにおいてあるのである。人倫を欠いて個人がいきなり大生命や神に帰一することは、聖人と仰がれてゐる様な人はさておき、普通には至難のことである。日本人は誰でもさうした人倫としての國に生きてゐる。大生命の中枢たる天照大神を祭り、それと合一されてゐる天皇を中心とし、一大生命を実現してゐる日本國において、ヒトとなつてゐる。その國民として永遠の大生命をアラしめてゐるのが日本人である。そして、この様な我々日本人の本来の面目を端的に語つてゐるのが『古事記』なのである。

では、どうして『古事記』がその様な書なのであらうか。それは『古事記』が文字のない長い長い上古から代代語り継がれて来た「神語り」を記した書だからである。目に見える庶物の崇拜から、目に見えぬ稲靈の生命の崇拜を通じて、更に人の清明心において超越され、一切にその所を与へ八百萬の一切を神たらしめる神の信仰、更に日の御子の天降りによる國の肇めに至る「神語り」を記した書だからである。

一般に「語り」といふものには、人々の生活体験の様々なことがらが、その時代時代の価値観に従つて採り入れられてゐる。その價值観や理想は時と處が推移するにつれて、或は落され或は消え去り、又新たなものが加へられる。さ

ういふことが継続していくうちに理想化に理想化が行はれ、普遍性のあるものが重層的に残存包蔵されてくる。それが「語り」の特質である。沉んや神語りをや、といふべきである。「語り」と違つて、書かれた作品などはさうはいかない。例へば、古事記と並べられる古典の『日本書紀』は、律令制を定着させる國家的目的のために書かれた書である。その編纂に當つては、もとより伝統的理想を伝える古文書や諸本などをふまへてはゐるが、日本人や日本の國の深層たる神ながらの心や道を明らかにする点で到底『古事記』に及ばないのは以上の理由によるものである。そこで、次に『古事記』と『日本書紀』の成立についての概略に目を向けてみよう。

五世紀頃から盛になつて来た大陸文明や渡来人の影響は、日本國の権力生活や經濟生活を進めたが、その結果はまた國內に種々の混乱をまき起した。この混乱を鎮め、國の安定と發展を目ざして、律令的國家体制攝取の努力がなされるに至つた。しかしその際、律令的國家体制の基底にある儒家法家の思想や仏教も流入して来た。そこに伝統的思想との葛藤が起り、口誦によつて傳へられつゝあつた「神語り」の廢絶が起つた。その廢絶を防止する為に漢字を用ゐてその内容を記しとどめることが行はれた。しかし、當時は未だ日本語を漢字に表記する際の規準もなく、筆者の勝

手氣儘の流義によつたため、その写本は僅か一世紀もたたぬうちに元の日本語通りには読むことができなくなつてつたものが大半であつた。

ところで、律令的体制は現世的な権力者たる君主の教令であり戒戒である。その律令制を推進された日の御子聖徳太子の十七條憲法によれば、仏教を深く信仰された太子は律令の權威の根據を權力にはなく超越的絶対的眞理たる三寶にありとされ、君臣の分は天地の如く覆へすべからざるものとされた。しかし、實際には、律令体制に伴つて入り來つた易姓革命思想は君の超越的な權威を認めず、君主の位は民意が決定するといふものであつたから、當時の民意の趣くところでは、天皇をも凌ぐ勢をもつた蘇我氏の專横を制止することが難かしかつた。そこで太子は、我國において君臣の分を正すのは力や偶然の民意ではなく、この國が一大生命の顯現であり、天皇は日の御子であるといふ傳統にかへるべきであることに氣付かれた。その後、天皇記・國記・臣連・伴造・國造・八十部・併公民等本記の編纂を企てられたのはそのためであつた。

この太子の自覚が大化改新を経て、近江令を生み、更にこれをうけた天武天皇はより具體的積極的に律令の制定を進められるとともに、これと並行して傳統自覚のために修史の事業を起されることとなつたのであつた。

その結果二十年後には大寶律令が施行されるに至り、律令的國家体制は完成したかに見えた。しかし大宝律令は實際にはあまり通用しなかつたらしい。それは、未だ天皇や國家の基底にある深層の伝統を明かにする立國法の面を欠いてゐたからである。やがて養老四年になり不文憲法ともいふべき『日本書紀』が成立したことにより、養老二年に改修された養老律令が天下に受け入れられることになつたのである。

さて、その『日本書紀』は劉知幾の史通に則つて編纂された史書で、用語も日本語でなく漢文を用ゐてゐる。しかし『日本書紀』はシナの史書にない「神代紀」二巻をその最初に置いてゐる。その「神代紀」の本文はといふと、我が國古来の「神語り」の伝統を、新たに書紀の目的に適ふ様書き改めたものであるが、同時に「一書曰」とか「一曰」として舊本の姿をもそのままに記載してゐる。この「神代紀」により日本國が一大生命の顯現たる國であり、君たる天皇は天照大神の本系直系である所以を明かにしようとしてゐる。一方第三巻以下の「人皇紀」の部分においては、その日の御子たる天皇が絶えず天照大御神を祭られるとともに、儒教的徳治仁政を體現する天命をうけた聖人天子たることを歴史の上で明かにしようとしてゐる。この

『日本書紀』三十巻の成立により、シナ語で記された律令法典もそのまゝで日本人各人の法律として活かされるに至つたのである。

これに反し、『古事記』の成立は、公の『日本書紀』編纂の事業とは違つて、宮廷内の内々の事として行はれたものであつた。天武天皇はかねて宮中内に傳へられた古傳承の古寫本を所持され、その古い讀法をも傳承されてゐた。また、佛教教學にも深く通じて居られたので、その古傳承が、律令を活かす上で直接には役立たないが、その基底をなす大切なものであることを感得されてゐた。そこで、その古寫本の讀方の断絶を惜まれ、側近に仕へる舍人稗田阿禮に親しくその素讀を傳授されたのであつた。それから四十年、當時皇太子妃としてこの事情を見知つて居られた元明天皇は和銅四年太安萬侶に命じて、老いたる阿礼の素讀するところを、當時の最も整へられた日本語の表記法を用ゐて書き改めさせられたのである。従つて古事記には「神語り」の原姿が最もよく保たれてゐるばかりでなく、それが日本語で記されてゐるところに計り知れない尊い含蓄があり、手にとるごとに汲めどもつきぬ走り井の水の如く、新たに身を潤ほし又清めて止まぬものをもつてゐるのである。実に『古事記』は我國最古の古典であるが、日々に新たな新典といふべき書である。

(本会特別會員・学習院大学名譽教授)

雑読の五十年

有田一寿

◇ 「読書録」というものを大学一年の時からつけ始めた。だから五十年以上になる。今も続けている。出版社、読了年月日、頁数に加えて、私なりの読后感というか勝手な短評をつけ加えている。

大学時代、つまり戦前と戦後と二つの時代に分けてみると、読んだ本の種類で、その頃どんな事を考え、どんなことに興味と関心をもっていったかがハッキリと浮き彫りされて自分ながら懐しい。

読書については、私は雑読主義というか、悪く言えば乱読である。哲学や思想ものがあるかと思えば、恋愛小説や推理小説、捕物帖や忍者ものもある。したがって、頭の中も雑然としていることは間違いない。それが学者などになれない証拠でもあり、仕事も、政治、教育、経済―会社にしても建設業からレコード、放送、テレビ番組の制作、又学校も大学二つ高校一つを理事長として経営している。全く読書と同じくまさに雑読主義が仕事の面にも現われてい

るように思う。

ただ、七十歳を過ぎてみると、今更一つにしぼることも出来ず、また、私自身にその気もない。半ばへりくつにもなるが、これも一つの個性だと思ってみずからを慰めている次第。

◇ 大学の頃の読書録を繰ってみると雑多なものを読んでいるが、今でも私に強く影響をあたえてくれたと思われるものが二つはある。一つは、アントニー・アドバースという五巻にわたる小説と吉川英治の宮本武蔵とをあげたいと思う。前者は、三笠書房から出版されたもので、原作は、ハーヴェイ・アレンで、訳者は大久保康雄氏である。一巻が三五〇頁位なので、みんで千七百頁ほどになるが、読書記録をみると、毎日一冊づつ読んでいた。

徹夜で、大学の講義もさほって読みふけたに違いない。内容は、一人の孤児がある牧師に引きとられる。そこでさまざまな話も牧師から聞くが、青年になるにつれて、もっ

て生まれた強烈な個性が芽を出し、いろいろな危険な体験も乗りこえ大きな実業家になってゆく。ナポレオンに軍資金を貸すほどの、全ヨーロッパを支配するほどの傑出した実業家となってゆく。五巻目の短評を今ひもといてみるとこう書いている。

「読み終わった。人間の小知の頼りなさど大自然の大きさ、神の摂理の不可思議さを感じた。一人の人間の生涯というものを深く考えさせられた。今二十五歳の自分が四十歳、五十歳になった時、もう一度訊み返してみよう。俺はアントニイ・アドバースのような人間になるぞ」

と書いてある。全くとお笑いものの感想だが、青春時代の気負いもあって、興奮した気持で書いたものだろう。

◇

宮本武蔵も面白かった。これも前著同様、毎日一冊づつ読んでいる。「大学の講義よりよほど人生勉強になる」——と寸評しているところを見ると、いろんな意味で没入して読みふけたものであろう。

旧制高校から大学にかけては、愛読書という程繰り返して読んだものはないが、当時の学生の間で流行になっていたようなものを読んでいる。例をあげてみると、横光利一の「旅愁」、「実いまだ熟せず」や西田幾太郎の「善の研究」、アンドレ・モロアの「フランス敗れたり」、また、「戦争と平和」や「罪と罰」「春の水」のような、トルストイヤツ

ルゲネーフの善作も読んでいるが、その間に「哲学の貧困」(マルクス)やマルクス・エンゲルス傳(リヤザノフ)も混じっている。

日本のものでは、河上肇博士の「自叙伝」、伝記と追想(河合栄次郎)、共産主義批判の常識(小泉信三)、日本とアメリカ(南原繁)、天の夕顔(中河興一)、武蔵野夫人(大岡昇平)等々が雑然と読書録に綴られている。今、頁をくつてみるととても懐しい。

◇

戦後の昭和二十年代には、社会主義、民主主義関係のものが多いがこれは誰も辿った読書歴であろう。

最近読んだものの中で、つよく印象を受けたものを三冊あげてみると次のものになる。

一つは、「日本歴史を点検する」(司馬遼太郎、海音寺潮五郎対談集)、「小さくとも命の花は」(平岩弓枝)、「宿敵」(上)(下)(遠藤周作)。

「日本歴史を点検する」は講談社から二十年も前に出たものなので、多くの人に読まれたものと思うが、私は、以前と最近と珍しく二回読んでいます。最近読んだのは仕事からみだから必ずしも純粋な気持からだけではない。

私は、二十一年前に、日本テレビに頼まれて、ユニオン映画という一億三千万の資本金のささやかな会社を創立した。会社は小さいが株主と取締役は不似合なほど大きな会

社に出資して頂き取締役にもなって頂いた。ブリヂストン
タイヤの石橋幹一郎さん、三菱電機、出光興産、日本テレ
ビ、電通、大日本印刷等々。この会社が五年前から、年末
時代劇をつくることになり、十二月三十日と三十一日の両
日約三時間づつ計六時間を日本テレビで放映したし、今年
も又「勝海舟」を製作することになっている。最初は忠臣
蔵、次は白虎隊、次は田原坂、次は五稜廓とつづき、昨年
は奇兵隊で、いづれも忠臣蔵以外は幕末から維新にかけて
の物語なので司馬遼太郎の作品と縁が深くなった。

こんど読んだ「日本の歴史を点検する」という本も、何
ヶ所も、私が恥しくなる程いろいろなことを勉強させても
らった。一つ二つ例をあげてみると次のような箇所である。
「黒船が嘉永三年に日本に来た時、江戸の治者階級は腰
を抜かす。しかし、びっくりするだけでなく、俺もあんな
蒸気船をつくってやろうと思った者が少くとも三人いた。
一人は島津斉彬、もう一人は鍋島閑叟、それから伊予の宇
和島の伊達宗城です。」

伊達宗城など高々十萬石で、いまの宇和島市程度の予算
もありません。それでもあれを開発して国産で造ってやろ
うと思った。こんな民族は、少くともアジアにはいなかっ
た。三藩同時にスタートしてるんですね。——中略——
それでお驚嘆すべきことに、三年後には三藩とも相前後
してできあがっています。伊予の宇和島なんて、別に他の

二藩のように洋学施設があつたわけではないんですが、や
りとげている。……藩から命じられて実際に造った人間は、
蒸気のこと船のことも何も知らない提灯張替えのおっさ
んで、かつては粉の行商をしていた。尤もボディの方は、
当時の村田蔵六といつていた大村益次郎が宇和島に流れて
来ていて、それがオランダの造船の本を見るだけで造りま
した。なんにしても、こんな民族ってないんじゃないでし
ょうか」

今一冊は、「小さくとも命の花は」(平岩啓枝)で、生まれ
た時九五〇グラムの未熟児で、とても育つまいと思われて
いた小さな命が、懸命に生き続けた生命力と、それを支え
た両親、医師、教師の命がけの努力で生命をとりとめ、育
ってゆき、小学校のマラソンの選手になった。
私は感動のあまり、何回もメガネをはずして涙を拭った。

以上、過ぎた五十数年の雑読の中から一、二拾ってみた
が、テレビやラジオを受動的に視聴するよりも、活字を追
い、時には読みかえしのできる「本」の貴重な価値は今後
とも変らないのではないか、と思っている。

(本会評議員・クラウンレコード会長)

少年時代の読書についての思い出

福地重孝

私は茨城県珂北の交通不便な山村の農家に生れ育った。

春夏秋冬の四季の変化は極りなく、風光の美しい点では、現在住む市川の青松などとはくらべものにならない。子供時代はそうした環境の山野を跋渉し、豊かな山の幸には恵まれていたが、印刷物―読みものには飢えていた。二十四キロはなれた町の本屋に予約してとどけられる一冊の「少年倶楽部」をよむことが無上の楽しみであり、教科書以外ではそれが社会に開かれる唯一の窓であったのである。発行日より一日おくれて配達される日刊新聞紙も、ゴミ・反故・消耗品どころか貴重品であった。

たしか、小学五年生の時であったと思う。「少俱」の注文がおくれ、買いそこね、私は不甲斐なく悲しみ、早速親友が白石君（故人）から借り、沢山の原稿用紙を買い求め、連載ものや目ぼしい記事を、放課後から夜おそくまでガラス・ペンで毎日せっせと書き写したことがあった。古記録、希観本の筆写ならいざしらず、今日のような出版洪水時代、リコピー時代には到底考えられないことである。しかし私

にとつては、本にまつわる思い出としては、いろいろな意味で忘れられない。

私は小学校時代から、大学院時代までに、多くの良い師にめぐりあったことを、この上なく幸せと感ずて感謝している。小学時代低学年の分教場（複式教室）から高学年の本校に移ったころの恩師江幡久米吉先生のことを、いの一冊に特記したくなる。少年時代の読書のことを考えていると、恩師の人間像が二重に重なって映し出されてくるのである。

恩師江幡久米吉先生

先生は当時茨城県下に中学校三校。外に師範学校と女学校が一つしかなかったころの師範学校（明治三十九年）の卒業生で、佐都村（現常陸太田市）の出身であられた。先生はわがふる里久慈郡里美村（当時小里村）の校長として赴任してきたのは、大正十五年四月で昭和十二年三月五十五歳で退職された。

当時経済恐慌から農村が脱しきれないでいたとき、先生は上級生徒の農事の実地指導のほか、村民の自力更生運動

のため、寢食を忘れて昼夜活躍され、全村の父兄から信望を集めていた。一言でいえば、温厚篤実、不言実行の人で、多くの人を世話し、多くの子弟の教養に生涯貢献なさったのである。

先生は、県北僻地の少年らのために、教育施設が県南地方よりおこなわれていることを憂い、老朽狭隘な校舎を改築し、運動場を拡張した。一方、農業や体育のすぐれた先生を招くことに意を注ぎ、ことに上級学校進学率においては、他町村の学校に比して群を抜き、父兄を歡喜させたのであった。格別受験指導や補習もなかったが、東京の学校を目指した者は、不思議なくらい合格した。それは日ごろ先生が強調していた「読書」「頑張り」「根性」の指導の賜物であった。

児童たちが登校のため、寒い北風にさらされ、頬を真赤にして校庭に入ると、先生はご自身大きな竹箒で、広い校庭を掃きながら「みんなお早う」とにこにことして慈父のごとく温かく迎えてくれる。それは裸足で運動するとき怪我をしないようにとの真心からであった。

県下でも大校長といわれる先生は、非常に多忙であったにもかかわらず、授業時間をもち、豊富な読書と人生経験に裏づけられたお話はとて面白く、退屈するようなことはなかった。また、先生は土に親しみ、自然を愛し、花を栽培し、植物を育てることのよろこびを、子どもたちに教えた。農業実習の時間などには紺の山褌袴に股引（農家の労働

者）をはき、生徒とともに人糞尿や鶏糞（肥料）を担ぎ、鋤をとって土地を耕し、種子をまき、雑草をとり、共に汗を流し、共に収穫のよろこびにひたつたのである。わからぬことを質問すると、にこにこやさしく教えられ、「植物図鑑」をよんでごらん。「○○事典」をよんでごらん。もつとくわしく書いてあるから」とお手本を示すのであった。

学校文庫

そのころ先生のくらしは貧しかったという。先生は酒も煙草ものまなかった。しかし、酒好きの教員には自腹を切つて、「日ごろはご苦労」といって振る舞われた。「私の給料は農家に比べて高すぎる」と言い、月給を割いて有益な図書を一冊一冊購入し、学校文庫に寄贈された。（村人の回顧談）

金縁眼鏡に、白いハンカチを胸のポケットに、りゅつとした背広服で、水戸から学校視察に見える県視学より「僕らの先生は偉いんだ」と、わが師を誇りと思う教師像を、子供の小さな胸に抱かせた。「貪賤もうつす能はず、威武に屈しない大丈夫」に映したのである。

先生は、公務で町に出張のときは、いつも古い自転車のペダルを踏んで、汗を流して山坂道を往復し、村役場から受ける出張旅費もご辞退することがあったという。（元助役談）それを受けた時には、子供たちの「頭の栄養剤」「良書」を熱心に吟味して、選んで買い求め、文庫の蔵書を増やし

てくださった。われわれ子供たちは「本」に飢えていたから、鶏が完全飼料をついばむが如く、文学、歴史、地理、伝記、さては、自然科学の本に至るまで手あたり次第に読することかできた。今にして思えば、この少年時代に読まなかったならば、恐らく生涯読む機会を逸したのであろう内外の名著名作が含まれていたことに驚くのである。先生は読書について特別のご指導はなさらなかった。自信を持たれて与えた良書を読むのを見て、その消化具合を見ておられた。「よく考えながら読むんだよ」「よい友を選び、沢山よみなさい」と優しく諭されたのであった。退職時にはこれらの蔵書を学校に寄贈し、自から蓄財がなかったばかりか、借財を背負って村を去ったのである。

私が進学のため東京に出てからも、しばしばお便りがあり、第二の人生を楽しんでいる様子を知らせてくださった。上京した第一番に手にした本は、プラトン著『ソクラテスの弁明・クリトン』という岩波文庫であったことが、本にまつわる縁として深く印象にのこっている。文庫版の一つ星定価二十銭。九十四頁の小冊子。久保勉、阿部次郎訳のものである。この本は大正十二年改訂六版になっているし、文庫としては昭和二年が初版であるから、私が手にしたころは、相当の読者層があったのであろう。田舎から上京したばかりの私には、孔子・釈迦・キリストのことは多少知っていても、ギリシャ・アテネの哲学者、ソクラテスの事

蹟についてはほとんど無智に等しかった。しかもこの小冊子は在京先輩の小学校教師向山嘉章先生がくださったものである。どのような意図でくれたのか問い正す機会がなかった。しかし、私はこの小冊子との出会いによって、世界史上比類まれなる人格者、人類永遠の教師の生涯における最も意義深い光輝あるラスト・シーンをよみ、心の打ち振える感激を覚えた。良心のかたまり、真実の善、徳の意味、正義ということ、上京したばかりの浅学者には、難解なところもあったが、この本を入手してからは、学生服のポケットに入れて、今は市街地と化した池袋駅の東側の根津山の雑木林の紅葉の下を逍遙しながら、ある時は、武蔵野の面影をとどめていた千川堤の桜並木の古株に腰かけて、静かに読みふけったりした。ある時は真夜中に学校の講堂の中で、ただひとり、大きな声で朗読し、精読、熟読し、対話の絶妙な修辭に感嘆したことがあった。『弘道』の編集者より原稿を乞われ、書庫に入って「ソクラテスの弁明・クリトン」を探し出し、ほこりをはらって奥書を見たら、毛筆で「昭和三十六年（一九六一）十月十九日、再読して大なる感激を覚える」と書きこんであった。

吉田松陰は、「人古今に通せず、聖賢を師とせずんば、則ち鄙夫のみ、読書尚友は君子の事なり」と、また「徳を成し、材を達するには、師恩友益多きに居り、故に君子は交游を慎む」と、また「冊子を披繙せば、嘉言林の如く、

躍々として人に迫る、願ふに人読まず、即ち読むとも行なわず、苟も読みて之を行はば、則ち千万世と雖も得て尽すべからず。噫、復何をか言わん。」(野山獄文稿)で門弟読書

子をさとしてしているが、私の少年時代の読書のことを思うと、師の恩、益友の影響が大きかったことを痛感するのである。

(本会会員・日本大学名誉教授)

初秋の読書のために

土 田 健 次 郎

「愛読書について」という題を編集部からいただいたいて当惑した。どうもこれはという本に思いあたらないのである。仕事柄毎日日本は読むし、感銘を受けたものも少なくはないのだが、その中で一、二冊を選ぶことがどうしてもできないのである。

ある朝、一時限目の授業が終つて教員ロビーでぼんやりしていた。講義の余韻もあったが、些か寝不足でもあったのである。その時いきなり顔の前にマイクをつきつけられ、同時に「あなたの好きな言葉を聞かせて下さい」という女性の声。驚いて声の方をみると、テレビで見覚えのある女性アナウンサーの笑顔とカメラをこっちに向けているカメラマン、それに記者。何でも好きな言葉のペストテンか何かを調べているのださうである。とにかく不意だし、適当

な言葉も思いつかないので、「思いあたりません」の一点張りであったところ、ねばっていたアナウンサーもあきらめて、近くに坐っていた他の教員の方へ移っていった。ところがインタヴューを受けた先生方はすらすらと「出会い」とか「真理」とか答えられる。私にはそれが驚異であつた。

好きな言葉を答えることは、それによつて自分の信奉する価値観を表明することである。私はまだそのようなものを持ちあわせていない。それにそれはまた、自分の人生観を他人に向けて固定化してしまうような気がするのである。おそらくこのように大袈裟に考える必要は無いのである。即座に答えられた先生方は、ふだんから座右の銘を持っておられるのでなければ、その場で頭に浮かんだ言葉を口に出されたのであろう。しかし、今の自分にはある程度

考える時間をもらったとしても、こういう質問に答えられる気がしないのである。そしてそれは、「愛読書」についても全く同じである。

言い訳めいたことで紙数を費やしてしまったが、編集部からの「例年の通りの銷夏号」（刊行は八月三十一日の予定であるから実際には初秋となろう）という文面に甘えて、私の専門とする中国関係の読書案内ということで御ゆるしいただきたい。

一、宮崎市定『中国史』上・下（岩波全書）

岩波書店 一九七八年

私の書棚に並んでいる宮崎博士（京都大学名誉教授）の本を数えてみたら二十二冊あった。翻訳、編集の類は除いてである。

博士の著作に初めて接したのは、『中国に学ぶ』（朝日新聞社、一九七一年、後に中公文庫）である。私は一時この本を繰り返し読んでいた。本書刊行当時、中国はまだ文化大革命の最中であり、日本でもそれに呼応する研究者がマスコミをにぎわしていた。その中で博士の冷静かつ鋭利な分析と批判は極めて異質のものであった。文革の終息と共に博士の予言は的中していき、それにつれて私の博士に対する信頼も深まっていった。以後、博士の著作から多くの示唆を得ている。

当時、博士と同じ京都大学の若手たちの『革命論集』（一九七二年二月）という本がやはり朝日新聞社から出た。

この本では、林彪の「中国共産党第九次全国代表大会での報告」を取り上げ、次のように解説している。「中国の人民は、林彪を「毛沢東同志の親密な戦友」と呼んだが、それは決して単なる誇張や権威づけではなく、歴史的に十分理由のあることなのである」（三五九ページ）しかし、この本の出版に前後して、中国政府は、正式に半年前の一九七一年九月に起こった林彪の失脚と死を発表した。同じく中国史に関わりながら歴史を見抜く目を持つ者と持たぬ者の差を、当時痛感したものである。

博士の数多くの著作の中でどれを取り上げるべきかは難題といえる。名著の誉れ高い『雍正帝』（岩波新書）にしてみようか、あるいは斬新無類の『論語の新研究』（岩波書店）を取り上げようかとも思ったが、ここでは比較的最近の『中国史』上・下を選んでおいた。中国の歴史を景気変動を軸に捉えるという実に大胆な通史で、誇張した眉唾の議論と思う読者もいるかもしれないが、背後には歴大な学識の裏付けがある。本書の躍動感溢れる歴史把握には、おそらく中国関係の図書になじんでいる人ほど新鮮な驚きを感じるのではなからうか。私も本書を精読しながらしばしば啓発されるところがあったし、何よりも読書の興趣を味わうことができた。平易な文体と明晰な内容を持ち専門的な

知識無しに読めるこの通史は、今までの中国史の中で最も刺激に富む好著であろう。

二、高島俊男『水滸伝の世界』

大修館書店、一九八七年

この本を読んだ時、久しぶりに面白い本に出会ったと思つたものである。著者は岡山大学教授を勤められた。一般読者にもわかりやすく書かれているが、出版当時から専門家の間でも話題になった。絶賛に近い書評を二つ見たことがある。

本書は『水滸伝』を読んだことのある人にとって面白いのはもちろんだが、まだ読んでいない人にも奨められる。

おそらく一読後『水滸伝』そのものへの興味をかきたてられる人は多いはずである。『水滸伝』は梁山泊に結集したお尋ね者たちが時の不正なる権力に対して大暴れする中国近世を代表する大河小説である。『水滸伝』自体は講談本の集大成のようなものであるが、これに対する学術的研究は中国・日本で既にかんがりの歴史と成果を持つ。本書は歴大な研究成果を十分に咀嚼したうえに著者自身の見解をも加え、総大将はなぜだらしなないか、豪傑たちの破天荒なキヤラクターとあだなのいわれ、史実との関係、作者は誰か、どのテキストが最善か等、話の種から正統的な問題まで、よくこなれた内容と達意の文章で十分楽しませてくれる。

他の書評でも言っていたが、テキストの問題など上質の推理小説を読むように文句なく面白い。なお宮崎博士にも『水滸伝』（中公新書）という歴史家の目から見たユニークな書があり、あわせて読まれるとかなりの水滸通になれるはずである。

同じ著者には『中国の大盗賊—天下を狙った男たち』（講談社現代新書）があり、これも初秋の読み物としてうつつけの快著である。

三、楠山春樹『老子—柔よく剛を制す』

（中国の人と思想4）

集英社 一九八四年

歴史、文学ときたので、最後に思想の本を紹介しよう。少し前に『新潮45』という雑誌で、高校の先生が今は亡き中国史の大家の『論語』解釈にかみついていた。続編が出たり、同系統の週刊誌が取り上げたりしたが、さほど話題にはならなかったようである。ところで、この大家が文化勲章を受賞したことに対する異議を、大阪大学の教授も『中央公論』のコラムで唱えている。事の当否はともかく、一般（特にマスコミ）と専門家の間における評価の食違いは珍しいことではない。

井上靖の『孔子』がベストセラーになり、また孔子や『論語』に関心が持たれるようになったのは喜ばしいこと

であるが、さて中国古代思想について、一般向きに書かれしかも学問的な水準を維持したものとなるとどれほどあるか首をひねってしまふ。明治以後の研究の集積をほとんど参照せず読者に媚びた本が横行していると嘆く専門家は多しはずである。その中で本書は安心して奨められるものの一つである。

本書の著者は、早稲田大学教授。日本中国学会理事長、前日本道教学会会長。日本の中国思想研究を代表する顔といつても過言ではない。本書は一般向けでありながら、学問的な成果も十分にふまえられている。派手な論調を見慣れた目からは地味な内容に見えようが、丁寧に読めば芳醇な学問の世界が開けてこよう。

例えば「大器晩成」というのは『老子』に出てくる言葉

学生社刊『アメリカの心』

小 谷 隆 一

ある高名な評論家の方から、「とても面白いですよ、一度読んでみなさい」とすすめられて一読して以来、すっかりこの本の虜になってしまった。

であるが、これは普通、大器は完成するまでに時間がかかるという意味にとられる。しかし著者は、大器は永遠に完成しないことだと言う。なぜそうなるのか。本書にはこのような『老子』の有名な章の斬新な解説の他に、孔子が老子に教えを受けたという話が『史記』にあるが、今どきこれを史実と思っている学者はいない、それならばなぜこのような話が出てきたのか、老子は後代神格化されていくがその経緯は、といった『老子』にまつわる諸問題についての著者の創見を含む最新の学説が平易に語られている。二千年以上の時をこえて古典として生き続けてきた『老子』の奥行が、本書を通して知られるはずである。

(本会評議員・早稲田大学教授)

そして社内での講話の際にたびたび引用し、新入社員の訓話にもこの書物の一節を読みあげた。会社内だけでなく、広くロータリークラブの会合などでも紹介し、多くの友人

たちに推薦をした。大へん興味のある書物である。

この書物の日本語訳が出版されたのは、一九八七年末であった。当時、日本企業の海外進出はめざましく、一部の人びとは日本経済はアメリカを抜いた、アメリカ何するものぞ、という鼻高々の考えをもっていた。私はそれらの人々に対して、アメリカを馬鹿にしてはいけけない、この本を読んでごらんさない、と反論をくりかえしていた。

この書物の内容は、アメリカのユナイテッド・テクノロジという企業が、一九七九年から始めた企業広告の小論文を集めたものである。同社がウォール・ストリート・ジャーナルという新聞に毎月一回掲載した、詩とも称すことのできる短文のエッセイ七十五章がのせられている。

七十五章は、すべて右の頁に原文そのまゝの英語の文章、左頁にはその日本語訳が活字になっている。英語の勉強にもなる上に、日本語の訳文もすばらしい。原文の意図するところをそこなわず、日本流に文体をととのえて、美しい文章にしている。なおこの原書は、事業の推進者であったユナイテッド・テクノロジ社の社長であるハリー・グレイ氏の名を冠して、「グレイ・マター」という題名になっている。

目次を一覧するだけでも興味がわいてくる。

失敗を恐れるな

君は今日も泥棒をするのか

望みが高ければ退屈しない

たとえば「失敗を恐れるな」の項を引用してみよう。

君はこれまで何度か失敗した。きつと覚えては

いないだろうが、はじめて歩こうとしたあの時

君は転んでしまった。はじめて泳ごうとしたあの

時、君はおぼれそうになった。そうじゃなかった

かい？（略）

失敗を恐れちゃいけない。トライもしないで逃す

チャンスこそ怖れた方がいゝ

これから世に出ようとする、あるいは社会の荒浪にぶち

あたった若人たちに対して、実に恰好なアドバイスである

と言える。もっと日常に接することがらとして、「女の子」

を追い払おう、という小文もある。

今年、一九七九年は、女性たちのために、大きな

前進の一步を踏み出し、「女の子」を追い払うのに

最高の年だろう（略）

「女の子」は十代を過ぎれば、間違いなく女性に

なるはず、あなたと同じに、彼女にも名前があり

ます。使おうじゃありませんか

女の子という代名詞の濫用はアメリカにおいても同じで

あるらしい。若い女性の人権も尊重するのが当然で、女の

子、と言わずに名前を呼ぶべきであるという訴えである。

「今日も泥棒するのか」というのは、物を盗むことでは

ない。お金を盗めば捕まって罰せられる。しかしお金と同等に貴重なものである時間を盗んでも罰を受けないのは矛盾している。約束の時間に十五分遅れたら、相手の人の貴重な財産である時間を十五分盗んだことになる。時間に遅れてはならない、時間を大切にしなければならぬ、と説いている。

“脱管理のすゝめ”というテーマで、マネージとリードの差を述べている。人はマネージされることを望まず、リードされたい気持が強い。世界のマネージャーなんて聞いたことはない。世界のリーダーはある。馬を水飲み場までリードすることはできるが、水を飲ませるようにマネージすることはできない。もし誰かをマネージしたいのならまず自分をマネージすることだ。それに上達したらはじめてマネージを卒業する。そしてリードしはじめるのだ、と結んでいる。

“望みが高ければ退屈しない”という項目では、私たちの天然資源の中で最大の無駄は、自分の可能性を使い切れないでいる沢山の人たちである、という前提から始まっている。そのような無駄な歩みを改め、やってみようと頑張ってみたらどうか。名声は、出来そうもないことを探し出してやってみる時に生まれるものだ。そして、望みは高くもつのが良い、壮快な気分になるからである。

このような小論文が七十五篇記されている。いずれも日本語にして四〇〇字前後の短文であり、どの頁をひらいても容易に文章にとけ込んでゆくことができる。読んでいるうちに、ふと思ひあたるふしがあつてひとり微苦笑することもある。

この書物にもられているのは、単なる道徳講話でもなければ倫理訓でもない。いわば、アメリカ流の民主主義の立派な社会を築きあげるために必要な、個人の心がけを示す処世訓といつてよいかもしれない。

そのさとしが、時には愛の鞭のように、時にはユーモアを交えて、若者を力づけ、中高年層に勇気を与え、ひとしく人生の生き甲斐を見出すように仕向けている。

そして注目しなければならぬのは、このような文章が日刊紙の一面全面に企業広告として掲載されていることである。たとい一ヶ月に一度であっても、読者は大きな感動をもってこの一文を読んでいる。そしてこの書物がまとめられるまでに寄せられた読者の手紙は七〇万通、なかには長文の思いをこめた手紙も沢山あったという。また要望によって発送したり、リプリント(ポスター)は三六〇万枚に達した、と記されている。

この書物の前がきに、個人としていかに活きるかが、やがて国家としていかに活きるかを決めることになる、という主旨を基本テーマとして考えた。また、読者に考え方を

押しつけるのではなく、読者を考えに誘いこむという方針をとった、とあるが、いかにもアメリカらしい方法である。

アメリカ経済は衰退の途をたどっている、と指摘する人が多いが、このようなキャンペーンが数年にわたって継続されていることを見逃すことはできない。肩をいからした型でなく、ちょっと呼びかけるような話し方で、地道にモラルの高揚をはかっている。それをアメリカの心として、広く市民に呼びかけているのである。

国木田獨歩『武蔵野』

古川清彦

国木田獨歩の『武蔵野』は明治三十四年三月に民友社から刊行された本で、昭和四十九年一月に近代文学館の名著復刻全集に収められている。

私が国木田獨歩に興味を持った一つのきっかけは旧制の仙台一中生時代から徳富蘇峰翁に関心を持ち、昭和十年に仙台で翁の講演を旧制の二高生として拝聴したことにもよる。私は幸いにして、その後、土井晩翠・島崎藤村両翁の御宅にも参上出来たことは学生時代の貴重な体験となった。

これらの一文を読んで深い感動をうけた若者たちが、数年のうちにアメリカをさらに活性化させる大きな原動力となるにちがいない。国家の繁栄を招くためのすばらしいキャンペーンだと思う。

わが国においては、未だこれに匹敵する企業広告はなされていらない。アメリカの心底にひそむ大きな活力に敬意を表するばかりである。

(本会監事・イセト紙工(株)会長)

これらの明治文人の風格は立派で、しかも文明開化という時代の先覚者として国際的な視野も広がった。また戦争と平和が交錯する時代環境の中で、藤村・獨歩は恋愛体験もして、それを文学的に記録もしている。

「武蔵野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へゆけば必ず其処に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武蔵野の美はたゞ其縦横に通ずる数千条の路を当もなく歩くことに由て

始めて獲られる。春、夏、冬、朝、昼、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たと此路をぶら／＼歩いて思ひつき次第に右し左すれば随処に吾等を満足させるものがある。これが実に又た、武蔵野第一の特色だらうと自分はしみ／＼感じて居る。武蔵野を除いて日本に此様な処が何処にあるか。北海道の原野には無論の事、那須野にもない、其外何処にあるか。林と野とが斯くも能く入り乱れて、生活と自然とが斯の様に密接して居る処が何処にあるか。実に武蔵野に斯る特殊の路のあるのは此の故である。

されば君若し、一の小径を往き、忽ち三条に分るゝ処に出たなら困るには及ばない、君の杖を立てゝ其倒れた方に往き玉へ。或は其路が君を小さな林に導く。(中略) また多摩川はどうしても武蔵野の範圍に入れなければならぬ。六の玉川などと我々の先祖が名つけたことが有るが武蔵の多摩川の様な川が、外にどこにあるか。其川が平な田と低い林とに連接する処の趣味は、恰も首府が郊外と連接する処の趣味と共に無限の意義がある。(中略)

この多摩川については「忘れえぬ人々」に次の様に描いている。

「多摩川の二子ふたこの渡をわたって少しばかり行くと溝口といふ宿場がある。其中程に亀屋といふ旅人宿みせのくちやがある。

恰度三月の初めの頃であった、此日は大空かき曇り北風強く吹いて、さなきだに淋しい此町が一段と物淋しい陰鬱な寒むさうな光景を呈して居た。昨日降った雪が未だ残って居て高低定らぬ茅屋根の南の軒先からは雨滴が風に吹かれて舞うて落ちて居る。(下略)

この亀屋は現在「亀屋会館」という名称になり(神奈川県川崎市高津区溝の口六四一番地・Tel. 044-844-0011)、結婚式場・宴会場となっている。田園都市線の溝口駅下車で渋谷と厚木を結ぶ国道246号線に沿った処にある。旧亀屋旅館庭前には国木田獨歩を記念する文学碑も建てられている。

なお、東京の三鷹市には、三鷹駅北口の交番派出所すぐ裏に獨歩文学碑が建立されている。南口近所には山本有三記念館もあり、私は山本翁には度々お目にかかれたので懐しい。また周知のように駅南方の禅林寺には森鷗外・太宰治の墓所もある。こうした意味から首都圏の中でも、武蔵野の意義は再検討される必要がある。

余談になるが、国木田獨歩の恋人佐々城信子は長命で戦後まで生きられた(昭和24年11月22日歿)。昭和二十八年八月に私は栃木県真岡市に御遺族を訪問したり、遺影をいたゞいたり出来た。

私は昭和二十二年夏に実家が伊勢から日光市に移った。晩年の佐々城信子さんは真岡市で幼稚園経営に関係されていたようであるが、私はその頃現地を訪れなかった。

また明治二十八年の獨歩の塩原行きも古い話なので現地調査を残念ながら怠った。ただ日光山には文人墨客の参拝も多く山本有三、塩田良平、福田清人、成瀬正勝、釈迢空（折口信夫）、吉田精一、梅崎春生、前田晃（木城）氏等が来山されるので御案内したりした。

この中で前田木城翁は花袋、獨歩の友人だった方である。それから獨歩、花袋の日光での止宿先照尊院の菅原英信師が昭和三十三年までお元気だったので獨歩、花袋の日光時代の様子を伺ったりしたこともあった。いずれにしても社寺、名所旧蹟と文学の関係も作家、作品の環境の背景として無視出来ないものを含んでいる。歴史と風土に関連する文学研究の意味を反省し、記した次第である。

なお菅原英信師と徳富蘇峰翁が奇しくも同じ昭和三十一年十一月に亡くなられたので、その新聞記事をメモすると

『渋沢栄一伝記資料』を読む

私が今、愛読している書物と言えば『渋沢栄一伝記資料』と言える。読めば読むほど、寒気を感じる。確かに渋

左の様で、この御二人の風貌を偲ぶ資料として記録する。

○故蘇峰翁の葬儀。——故徳富蘇峰翁の葬儀は八日午後一時から港区赤坂の靈南坂教会で小崎道雄牧師司式により行われた。松野参院議長、十河国鉄総裁、芦田均氏ら数百人が参列、同志社大学総長、日本新聞協会会長らが弔辞をのべたのち翁の弟子熊本詩吟塾長瓜生田山桜氏が翁の辞世を朗吟、同三時すぎ葬儀を終った。

○菅原英信氏（日光輪王寺前門跡、大僧正）

七日夜七時半ごろ日光市山内照尊院の自坊で肝硬変のため死去、八十二歳。葬儀は十二日午後一時から自坊で行う。昭和二十二年から五年間輪王寺門跡だった。（日光発）

（本会会員・国文学研究資料館名誉教授）

小 野 健 知

沢栄一は素晴らしい男だったと思う。

今年三月から五月まで三ヶ月間にわたって、日本大学か

ら海外出張を命ぜられて、ドイツを中心に東欧諸国をも視察する機会に恵まれた。非常な不安と戸迷いを見せながらも大いなる期待に胸をふくらませているドイツや、単に戦争に敗れたということで歴史的な発展や文化や言語に関係なしに編成変えされていった国々への問題などもあり、兎に角、単一国家で単一民族から成り立っている日本ではとても理解できないような歴史の持つ重みをヨーロッパで感じてきた。その上、東・西ドイツの統一が目論まれ、差し当って西ドイツマルクが使用されることになり、そのきめ細いとりきめや情宣活動をまのあたり見聞できた。

しかし、このような壮大な国家劇を百年も前に日本で試みた人たちがあつた。明治の維新政府の若い人びとによる新しい国造りである。藩を廃して県を置くことが新しい仕事であつたり、新貨条令を作成し、長い間使用されてきた「兩」を廃して「円」を用いることを決めたり、藩札処分を断行したり、新たな税制を考案していくこと等、全く素晴らしいことを実現していく。さらに「邑に不学の人」がいなくなるように学制を頒布したり、徴兵制を施行し、嘗つて武士の特権であつたものを一般国民にまで適用していった。

いろ／＼な意味をこめて、日本人が「エコノミック・アニマル」と呼ばれるようになってからでも、久しい時が経っている。日本人は、世界中の人びとから、この豊かさの

故に、嫉妬と羨望と冷視の中で生き続けることになつたといわれる。

しかし、わが国が経済大国と称され、先進国家と謳われようとも、実は根の浅い繁栄という虚飾を身にまといるに過ぎないのでは困る。「ジャパン・アズ・ナンパワ」と言われ、「西洋から学ぶものは何も無い」とか、「モデルにするものは、既に何一つ見出せない」などと自惚れるのも、危険なことである。もしも、本当に何一つ学ぶべきものが見出せないならば、自分でそれを探してくる以外に途はない。真剣に二十一世紀の進むべき道を見出すために、暗中模索してでも、悔いを千載に残さないように致したいものである。

「暗中模索」と聞けば、恐らく、明治維新の時の人びとは、毎日毎日がこれの連続であつたのだろう。幕府を倒してはみたものの、新政権の基礎をどのように固めるか、政治目標をどこに置くか等、全く手探りの状態であつたのだから。

明治維新といえ、何ということなく、大久保利通・西郷隆盛・木戸孝允等が思いつく。この維新时期に、わが国の実業界を発展させるのに最も功績のあつた者は誰かと問われたら、渋沢栄一の名前を挙げてでも決して間違ひにはなるまい。わが国に「お金のなる樹」を西洋から移植し、育てあげ、資本主義の土壌を培養した男が、渋沢栄一だからで

ある。封建社会の残滓が至るところに見られ、賤商意識が民衆の中に強く残っていた時に、合本主義を標榜して、株式会社の組織を導入して成功を治めた者が、外ならぬ渋沢栄一である。明治初年に開明派の高級官僚として、当時の大蔵省の実質的な次官の役割を演じていたのに、その地位を惜しげもなく棄て去り、商人に身を転じた。「真直ぐでは立たない」とか「屏風と商人は曲らなければ立たない」と言われたその商人の世界に入り、泥まみれになりながら商人の地位を向上させた。

とにかく、栄一は、西洋の文物や組織を日本の土壌に定着させ、わが国の産業を先進国家なみの体制へと育てるために、あらゆる努力を払った素晴らしい男であった。

栄一の『航西日記』を読んでもみると、攘夷論者であった栄一が海外に派遣された途端に開国論者になっていく経緯がはっきりするし、また、異文化と接して驚嘆し関心を持ち、呑欲な程の好奇心からそれらを摂取しようとしている若者の姿が伺える。相像を絶する西欧の文明や組織や構造を見ても驚き、聞いても驚き、それを忘れないうちにメモをする。栄一の脳裡に秘められたそれらは、やがて帰国後に、資本主義の爛熟期のフランス文化をわが国に移入するための素地になっていった。一見すれば、栄一の生きざまは、節操のない変節漢に見えるかも知れない。しかし、栄一はそんなことに無頓着に、ひたむきにおのれの信念に忠実に

生きようと心掛ける。運命の不可思議な激流に翻弄されながら、とに角、栄一は逞ましく生き抜いていく。

この『伝記資料』を読んでいると、栄一がさまざまな企業の創設に関与し、手がけていたことがよくわかる。かなりオーバーな表現をすれば、明治期の日本において栄一が関与しなかった企業は一つなかった、と思われるほどである。

これは企業関係史を読めばよくわかる。栄一は考えや思想の中に生れたものを、そのまま企業とし、制度として活かし育んでいった。思想を定在化することは滅多に実現されるものではない。ややもすれば、思想は単なる抽象的な考えとして論議され、空しく忘れ去られることが多い。

ところが、栄一の場合は違う。彼は自分の道義感覚を、西欧風の近代化というオブラートに包み込んで、制度の中に巧みに体現し、見事に成就していった。しかも、自分が描いた理想的な制度に血を通わせ、活力を注入し、わが国の資本主義の萌芽を大切に育てあげていった。それこそ、先例も前例も何の手がかりもないところで、悪戦苦闘しながら、近代国家に必要な起業と人材とを育んでいった。第一国立銀行を始め、王子製紙、富岡製絲工場、東京海上火災、サッポロ・ビール、東京石川島造船所、帝国ホテル等の創設に関与し、発展させたその経緯が詳細に『伝記資料』に記されている。

また、『伝記資料』を読んで感じるのには、栄一の人づくりの巧みさという点である。たとえば、士・農・工・商と言われ、賤商意識が強かった社会において、敢えて産業立国を謳い、賤商意識を払拭させることと並んで、士魂商才に富む人物を養成することに励んでいる。東京商法講習所の維持・発展が、やがて現在の一橋大学として結晶するし、今後の社会には素晴らしい女性の育成が必要だとすると、東京女子学館の創設に関与したり、成瀬仁蔵の設立した日本女子大学の有力な後援者にもなっていく。

今や高齢化社会の到来といわれる。老人に関する対策に積極的に取り組んで、施設・医療・研究の三本の柱を有機的に結びつけ、「東洋一」と誇る国際的に著名な老人専門の施設が、東京の板橋区にある「東京都養育院」である。

この中央記念広場に、養育院のシンボルになっている銅像がある。社会事業の進展に心血を注ぎ、養育院の育ての親とも言われる「渋沢栄一の銅像」である。

人びとからは「こじき病院」とまで言われた養育院を、ここまで育てた栄一ではあるが、あるときは心なき人びとから「実業家の道楽」とまで嘲けられた。自分がパイオニアとなって敷いたわが国の資本主義の軌道を、自分の手で修正しようとするのであろうか。予期しないところに資本主義のひずみが生じ、落し穴のあることに気づき、構造的に発生してくる貧困と弱者を救済するために、精一杯の

努力を払うこと。これが死ぬ直前まで、栄一をかり立てて、社会事業に邁進させた原動力だった。「東京都養育院」という組織そのものは、栄一の「社会事業思想」が形となって顕現したものに外ならないと言える。

実業人である渋沢栄一は、論語算盤主義を唱え、経済の道徳化を謳った。そして福利厚生思想を高く掲げ、働く者の地位や境遇に対して深い関心と理解を示すようになった。中労委の前身である協調会が設立されたのも栄一の深い社会倫理思想の発露である。

『渋沢栄一伝記資料』を読むようになってから六・七年になるだろうか。これのどこを見ても、栄一の思想が脈々と流れているように感じられるようになってからでも久しい。「お金」とは、本来は人間に奉仕し、人間の役に立つように考えられたものである。「いつでも脱ぎ得ると思っただ衣が、鉄のような固さで、人間を締めあげ始めた」と語ったのは、ウェーバーであるが、ふと気がついたら、人間はいつの間にか、「お金」の奴隷になっていた、と言えよう。第一国立銀行の創設者である栄一は、この「お金」のこわさを十二分にわかっていたのであろう。願わくば、明治の激動期を巧みに乗り切り、未曾有の困難期を克服した栄一のように、豊かな心情を持ち、大胆な行動をとり、なおかつ人びとの信頼を得ながら逞しく生きたいものだ、と常に思う。

(本会特別会員・日本大学教授)

【題 想】

一 冊 の 画 集

細 谷 俊 夫

ここに一冊の画集がある。昨年十二月に出版された『野口明画集』がそれである。八十三点の油絵と水彩画が収録されており、その一つ一つに著者の『解説—制作時の思い出』が克明に記されている。豪華版の名に恥じない立派な画集である。

野口明先生は本学第二代目の学長であった。東大法学部のご出身で、行政官としての経歴が長かったが、旧制二高（仙台）の最後の校長、お茶の水女子大学長を歴任したあと、昭和三十七年から四十年にかけて、本学の学長を勤められたのである。昨年二月に病気のため入院されたが、ついに九月三日他界された。

先生は生来絵がお好きで、中学校の四年ごろから、水彩画会の研究所に通われたという。この画集の中の作品は年代順に配列されているが、一番古いのが大正四年、最後が昭和五十三年となっているから、その画業生活は実に六十年以上に亘っている。

「公職を辞してからは一介の素人画家として余生を樂し

んだ」と述べられているが、その穩健的確な描写力は素人の余技の域をはるかに超えているという印象を受ける。とくに風景画に素晴らしいものが多い。大正八年に描かれたという「田無街道の残雪」という作品を見ると、同じ年齢の頃私自身が水彩画を嚙った経験があるだけに、襟を正したような気持になる。いま学長室にある先生の作品は「梅咲く頃」という題で、昭和三十八年に新宿御苑で描かれたものであることを、この画集で初めて知ったのである。

この画集を丹念に見せてもらって感じたことが二つある。一つは先生が特定の先生に師事することなく、石井柏亭の『我が水彩』のような独習書を頼りに、終始一貫、絵を描くことに情熱を燃やし続けたということである。そして病軀をおして、長文の解説を執筆されたばかりでなく、ご逝去の三日前まで図版の校正刷に目を通されたというその執念には驚嘆のほかないのである。感銘を受けた第二の点は、三十数名の二高の卒業生の方々が、先生の画集刊行に一致協力してこれに当たり、ご存命中にこれを完成させるべく全力を傾注されたことである。この目的はついに果されなかったのであるが、旧制高校の卒業生らしい誠実さをもって、恩師の画集出版という協同作業に当たられたことに對して、私どもは心からの拍手を送りたいのである。

*白梅学園短大内誌「白梅」（昭55・2・25）より

（元白梅学園短期大学学長・東京大学教育学部部長）

戦前にはクーラーなどなかった。扇風機で間に合った。それがいまでは冷房設備が家庭にまで入り込んでしまった。

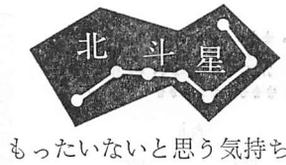
室内が冷えた分、熱が外に出る。家が建て込んでいる都会では、まずまず外気温が上がリ、クーラーは不可欠となる。

そのうえ、車の普及がある。エンジンも排気ガスも外気温を押し上げる。道路という道路はアスファルトで固められてしまい、雨水が浸み込まない。地中の水分は重要な気温の調節役を果たしてきたのに、いまでは下水管を流れ落ちるだけ。

東京電力管内では、夏場の電力消費量は気温が一度上がるごとに、約一〇万キロワット上昇するという。これは大型原子力発電一基分に当たる。一九七三年のオイルショック時代が懐しい。節電が奨励され、NHKも民放も、テレビは十二時前に送信

を終えた。それが、いまではほとんど二十四時間テレビである。そして、コマースシャルで消費がおおられている。

ホテルや大きなビルのトイレには紙タオルが備えられている。手の水分を拭い取るだけなのに、原木から



澤 英 武

バルブ、製紙の工程を経て、屑となってしまう。それぞれが、自分のハンカチを使えば済むことではないかと考え込んでしまう。

モスクワで暮らしていたとき、日本から来た友人に高級菓子のおみや

げをもらったことがある。木箱入りで、その菓子が口に入るまでに、五層の包装を解いていかなければならなかった。包み紙一枚一枚に、文化はあり、開く喜びもある。しかし、過剰は異常である。

ソ連では、通常、包装はない。買物客が容器なり袋なりを持参する。不足経済が続いているこの国で、使い棄て経済は夢の夢である。

しかし、資源有限が目に見えるようになっただけで、ソ連国民の生活を範とする姿勢が大切ではないだろうか。モスクワの町を歩くと、いたるところ「レモン」(修理)の看板が目につく。電気製品、時計、靴、何でも修理してトコトンまで使っている。

東京ではまだ使える冷蔵庫や家具が粗大ゴミとして棄てられ、型が古いというだけで十分に動く車がスクラップにされている。

胸痛と言え、昔は肋膜炎を考えたものですが、最近では狭心症や心筋梗塞が頭に浮かぶ時代になりました。胸痛にはその部位、持続、性質などの特徴に注意しましょう。

一 胸痛の場所

胸痛の部位は前胸部か背中に大別されますが、前者では、心臓が多く、後者では大動脈瘤が多く、また側胸部は肋膜炎が多いのです。

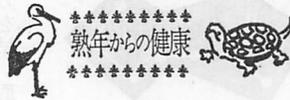
心臓では狭心症や心筋梗塞の場合が多いのですが、前胸部の中でも胸の真中が痛みます。心臓は左に在るので左の胸を押えている人がいますが、多くは心配する必要はありません。

また肋骨に沿って痛む場合は肋間神経痛が考えられ、その後で赤い水泡が生じ帯状疱疹の診断がつくことがあります。

二 胸痛の持続

胸痛の持続時間は瞬間的なものから二、三分、十分、あるいは時間の単位に続くものもあります。ちくちくという瞬間的なものは心配ありません。

分の単位は多く五分くらいのもので狭心症の可能性があります。狭心



(34)

胸痛



杉浦昌也

症は発作性に生じ持続のほか頻度も問題となります。時間の単位のものには心筋梗塞や解離性大動脈瘤などがありません。

三 胸痛の性質

心筋梗塞の痛みは今にも死ぬので

はないかと思うと形容されます。解離性大動脈瘤は大動脈の内膜に始まる裂け目が大動脈に沿って裂けるので大動脈は背中側を下行するので背中を上から下に向かう激痛が生じるのが典型的です。

四 胸痛の診断には？

胸痛の他に冷汗、呼吸困難、ショック、低血圧等を伴う場合は重篤で心筋梗塞や解離性大動脈瘤の可能性が高いのです。心電図、胸部レントゲン写真、超音波、CTなどの検査が必要です。

五 胸痛の治療

診断によりその対策が違います。狭心症では発作時にニトログリセリンを用いますが、発作の回数が増えた時、初めての発作の時などは特に詳しい検査が必要です。上述のようにより重篤な場合は入院することになります。

泊翁日記（四）

解説 古川哲史

明治三十一年の一月一日より七月三十一日まで

泊翁日記の第四回目は、明治三十一年の一月一日より七月三十一日までの半年分であるが、泊翁は昨年（三十年）十一月六日夜広島県味野村滞在中に椽側より落ちて受けた負傷が完治せず、一月三十一日になって、ようやく「繃帯を脱」している。

しかし、五月になっても「痛所未全快」の状態がつづき、たびたび医師の手当てを受けている。それで、五月二十八日には、皇后陛下のご誕辰で宮中へ召されたのを、「腰痛にて万一威儀を失ひてハ」と恐れて断わっている。五月二十九日に「右腰部へ皮下注射」、六月一日に「皮下注射」、六月九日に「腰痛診察」の記事が見えるのは、治療の終わっていないのを示しているよう。

が、六月中旬以降になるとその種の記事はなくなり、六月十六日には「怪我全快の祝」を贈られたことが出ています。従って、おのずから、社会的活動も旺盛となり、政界の動きへも敏感に注目している。郷里佐倉の人士としばしば会

っているが、旧士族家祿請願の件にその多くが関している。

明治三十一年

一月一日 晴

一、英照皇太后宮第三期御喪中ニ付、新年の御賀式一切無し。臣民一般の賀儀も皆廃止。

一月十一日 晴

一、眼病兎角不出来ニ付、今日甲野相招診察を受候処、頗る重症の趣にて繃帯を施し昼夜共不脱之。

一月十五日 晴

一、背痛少々宜敷ニ付、今日より甲野へ通ひ治療を受く。

一月十六日 陰

一、此度の負傷ニ付、親類、弘道会員其外より見舞状又ハ品物の贈遺有之、可返答之。

一月三十一日 晴

一、今日より繃帯を脱す。

二月十二日 風雨

一、今日より第一高等学校へ出勤。

二月十九日 晴

一、弘道会事務所へ出席。

二月廿一日 晴

一、日光にて御猟の鹿肉下賜。

二月廿三日 晴風

一、昨日の御礼として侍従局へ出頭、侍従を以御礼申上ぐ。

三月一日 陰

一、眼氣少々宜敷様なれども、干今眼翳ありて視力不明ニ

寄り両国眼医甲野方ニ通ふ。

三月廿日 朝小雨午後晴

一、秋季皇霊祭ニ付大礼服用賢所参内、畢て弘道会事務所へ参り午飯を吃し常集会出席、夕剋帰。

四月三日 晴

一、婦人部役員会ニ付午後神田共立学舎へ参会、婦人部叢

記本月限停刊の事を決す。

四月十日 朝雨午後晴

一、東京寛都三十年の祭典有之。皇上 皇后兩陛下二重橋外広場へ出御御式有之、市中も種々の余興有之、甚雑沓す。

四月十七日 晴

一、学士会院例会出席、夕剋帰宅。

四月廿四日 雨 日曜

一、小石川丸山町有栖川宮御下邸拝借、弘道会婦人部懇親会相開く。出席三十人余。

右の四月廿四日で日記原本第十四冊は終わり、「五月一日」から始まる日記原本第十五冊に移る。移ると、まず最初に「明治三十一年 旧曆戊戌歳」という年紀がある。

明治三十一年 旧曆戊戌歳

五月一日 晴

一、旧年十一月発令の士族祿制誤謬改正の義ニ付佐倉旧藩士より請願の希望有之、右ニ付今日吉見明相招請願いたし候共採用ニ相成間敷旨相諭候。

一、綾部於菊来ル。女婿大滝善介夫妻出京致し費用相嵩候ニ付金七円借用申出候。即為持遣す。

一、本月、来月の内酒田支会にて総集会相開くニ付、余ニ出張依頼来れども痛所未全快ニ付出張出来ず。商議員樋田魯一え名代出張の義頼遣す。

五月二日 雨

一、打撲後其部分へ神経病を発し、去月より神田明神下医師師岡の皮下注射の療治を受く。今日も午前同家に参り、午時帰。

一、警視属船茂芳五郎参り、内地雑居後宗教取締の義ニ付

談話有之。

一、昨日文部大臣西園寺公望依頼免本官、大学総長外山正

一任文部大臣。

一、樋田魯一出張承知の趣申来ル。

一、水野遵(元台湾民政局長)より台湾阿片処分贈来ル。

一、一昨年大海嘯の節岩手、宮城、青森三県下罹災人民へ

金五拾円施与いたし候処、今日岩手県知事服部一三より

右謝状来る。

一、此度米合衆国ト西班牙国と戦端を開きたるに付き本邦

ハ局外中立を守るべき詔勅出る。

五月二十日 晴

一、本月三日夜より熱気強く、医師の診察ハインフルエン

ザの由。体温三十九度に上りしが、漸々快方。今日より

床を出て家中を徘徊す。病中ハ筆を執るを悦ばず。今日

より又日記を記す。然れども病中主要なる事件より初め

米国の艦隊馬尼刺港内にて西国の艦隊を破りて全滅す。

後米艦西の古巴島を砲撃して撃退せらる。去十五日臨時

議會開会あり、昨十九日 聖上議院に行幸、開院式あり、

勅語を賜はる。

一、夕刻より南風大に起る。

五月廿一日 雨

一、昨夜の風ハ夜ニ入りて止まず、今朝ハ雨を交へしが、

十時頃より風止む。午後晴。

一、此度の議會ハ第十二回目なり。議長左のごとし。

貴族院

議長 公爵近衛篤磨 副 侯爵黒田長成

衆議院

議長(自由党) 片岡健吉

副議長(国民協会) 元田 肇

五月廿二日 薄晴 日曜

一、今日ハ大に快し、床を揚る。

一、中條精一郎、葭江同道にて来る。

五月廿三日 晴 北風冷氣

一、今日久々にて高等学校へ出勤。

一、野崎武吉郎氏より為見舞カステラ貳釜贈らる。

五月廿四日 陰 夕刻雨

一、昨廿三日午前零時伊勢神宮司斤失火、同斤并参集所焼

失、御宮ハ御屋根の茅半焼けたれども御無事なり。

五月廿五日 晴 午後風

一、備前児嶋郡在勤味岡盛泰氏来問す。為土産菓子一箱持

参。

一、午後兩國甲野氏へ眼病為治療出向。

五月廿六日 晴

一、医師大野秀太郎氏ニ肋骨部の痛ミの為に皮下注射を受

く。余程快き気味。

一、今晚午前三時三十二秒東京ニ地震あり。震動時間二分

十秒、水平動六厘弱、上下動七毛弱。

五月廿七日 晴午後風

一、昨朝の地震ニ付新潟県より左の電報あり。
南魚沼郡六日町ニ於て今(廿六日)午前三時四十分地震の為メ家屋破損、石垣破壊、其他路面に亀裂を生じたるの報あり。直ニ警部を出張せしむ。

一、大野氏参り、又前腰部に皮下注射を行ふ。

五月廿八日 晴

一、今日、皇后陛下御誕辰ニて宮中へ被為召候へ共、腰痛ニて万一威儀を失ひてハ恐入候事と存じ、所勞を以て御断申上。

一、午後弘道会事務所へ出席、夕剋帰。

五月廿九日 晴風

一、朝眼科甲野氏へ参る。

一、午後大野氏参り、右腰部へ皮下注射を行ふ。

一、下総寺本省三郎より書状参る。七月十日匠磋、吉田、豊和の三支会連合会を開クニ付余*の出席を請求し来る。

*「を」とあるのを「の」と改める。

五月三十日 雨帯風

一、酒田栗田保徳氏より書状来、同地総会を九月ニ延期す、其節講師の出張を乞ふ、と。

五月三十一日 晴風

一、例剋高等学校へ出席、帰路麟祥院へ参詣。

一、衆議院ニ於て去廿八日、鳩山和夫、長谷場純孝、尾崎行雄、大東義徹、神鞭知常、河野広中、田口卯吉、工藤行幹、山田喜之助、安倍井盤根、島田三郎より政府弾劾的上奏案を出し、昨日院議ニ附せしが、可とする者百十六人、否とする者百七十一人、五十五票の少数を以て破れたり。

六月一日 晴

一、今日も皮下注射を行ふ。

一、勝氏書の額面仕立出来る、代価金沓円。

六月二日 晴 夕剋少々雹降る

一、昨夜より又少々風邪の気味なり。

六月三日 陰 時々微雨

一、高等学校幹事及び書記同道ニて十時の汽車ニて千葉医学部へ参り、同校生徒の為に道德の講話をなし、夕剋帰宅。

一、今日ハ北風ニて甚冷氣、冬服ニて猶寒きを覚ゆ。

六月四日 陰 時々微雨

一、午後より弘道会事務所へ出席。夕剋帰。

六月五日 朝雨 午後より風雨

一、今日ハ弘道会春季懇親会の延会を神田淡路町万世俱樂部ニて開ク。会する者甚少なく、三十余人に過ぎず。籠手田、三浦(安)其他数名の席上演説あり。夜八時帰宅、下谷、浅草辺ハ出水ニて道路塞がり、車行甚困難なり。

六月六日 晴

一、十時第一高等学校へ出席。

一、荒野文雄一昨日病死、今日日暮里青雲寺へ埋葬ニ付為会葬罷越。

一、佐倉志田格来り、佐分利忠治家祿誤謬の義ニ付相談有之。

六月七日 晴

一、一昨日の風雨ハ東海道筋甚しく、汽車不通となる。其他東山、北陸の諸国も大雨にて川ニ出水の報あり。

一、帝国議会ハ七日間の延期被仰出候。

六月八日 晴

一、昨日より三日間、帝国議会の停会被仰出。是ハ昨日の衆議院議場にて政府の増稅案を否決せんとするの勢ありしを以てなり。

一、去る五日桜井純監氏病没し、今日丸山本町寺ニ埋葬するに付き為会葬罷越。

六月九日 晴風

一、野崎武吉郎氏を五番町の寓所ニ訪ふ。先日拙宅を訪問ありし挨拶なり。又、先日カステラ贈与の挨拶として支那香漬貳瓶持参。野崎定治郎氏、田辺為三郎氏にも同宅にて面会。

一、午後中野氏え腰痛診察を受に参る。

六月十日 晴

一、今日より議會開会。衆議院にて増稅案を議したるに、

二十八票に対する二百四票の多数を以て否決す。

一、今夕衆議院解散を命ぜらる。

一、佐倉より佐沼済来り、佐倉集成校特別認可学校たらんとの希望にて文部省へ問合の依頼を受く。

六月十一日 陰 時々雨

一、今日より入梅。

一、午後より弘道会事務所へ出席。夕刻帰。

六月十二日 陰 時々雨 冷氣

一、学士会院例会ニ付出席、夜七時過帰宅。

一、三河郡視学田部井柳太郎氏参り、当八月夏期講習会の節三河三郡の小学教員ニ道德学講習の依頼あり、承諾の旨申遣し候。

六月十三日 陰 時々雨

一、岐阜県人青木倉蔵、浅野栄太郎両名にて同人著述の論語提要を改修の義依頼申越す。

六月十四日 陰

一、松江人足羽中次郎来訪す。名産温鈍一巴持参。

六月十五日 陰

一、松江人三谷権太夫より楽山焼花瓶一对相贈らる。

六月十六日 薄晴

一、野崎武吉郎、田辺為三郎来訪。野崎氏より知せ怪我全快の祝として絹羽織地一匹相贈らる。

六月十七日 陰

一、森田莊藏、弘道会擴張意見申立の為来訪。

一、諸方より依頼の額面掛地教葉揮毫す。

六月十八日 雨

一、佐沼濟氏の依頼ニ付今日文部省へ出頭、嘉納治五郎(普通学務局長)、福原僚二郎(参事官)へ面会及相談。

六月十九日 陰

一、二本松人安倍井盤根為暇乞入来。

一、野崎氏近く帰国ニ付為餞別有松紋三反遣す。

六月二十日 薄晴

一、学士会院会友島田重礼^{*}及び同院書記寒沢振作何れも大病の趣ニ付、島田を其居宅ニ訪ひ、寒沢を医院に訪ふ。

島田ハ先々平らなる形、寒沢ハ少々宛快気の模様。

^{*}しまだちようれい、漢学者。字は敬甫、号は篁村。昌平校に学び、助教となる。明治になって東京に雙桂精舎を創め、のち東大教授、文博、東京学士院会員となる。著書に「篁村遺稿」(三卷)、「篁村文稿」(一八九八)

六月廿一日 陰

一、午後より駿河台にて曾我中將を訪問し、民法修正の義ニ付及内話。夫より淡路町にて神田孝平氏の病氣を訪ひ、^{かたがひ}婦掛神田小柳町にて安倍井盤根の旅宿を訪ふ。

^{*} かんだけたかひら、洋学者。乃武の養父。初め儒者の門に通つたが、のち志を蘭学に転じ、一八五三年杉田成卿の門に入り、

更に伊東玄朴、手塚律蔵などに従学した。以後著書調所にあ

つて教えていたが、維新後は新政府に召されて一等訳官、徴士となり、七一年には兵庫県令となり、天下三県令の名を得た。次いで地方官官議幹事長、文部小輔、元老院議員などを歴任、九〇年貴族院議員に勅選された。七四年には明六社に加わり泊翁と行動を共にし、また東京学士会員ともなった。

六月廿二日 陰

一、京都人麻生正蔵来訪す。成瀬仁蔵氏の計画せる女子大学設立に賛成せんことを求む。不賛成の趣答ふ。

^{*}なるせじんぞう、教育者。日本女子大学の創立者。小学校長をつとめたあとキリスト教の信仰にはいり、一八八二年奈良県郡山に伝道所を開き伝道に従事した。のち渡米してアンドバー神学校、クラーク大学に学び、一八九四年帰朝して大阪梅花女子校長となったが、この頃から女子大学設立を企画するようになった。(一八九八)

六月廿三日 陰晴

一、先日、自由を求め両党共に其党を解き、昨日築地新富座ニ於て両派合して一の新政党を組織し、憲政党と名く。

六月廿四日 晴

一、因幡岩美郡御陵村長通寺住職牛尾得明来り、同寺ニ安德天皇御陵地といふものあり、今度改修せんとするに付き、筆迹を寄附せんことを乞ふ。同帝の御陵ハ種々異説ありて一定の地なきを以て断に及ぶ。

六月廿五日 朝風雨

風不止 午前雨止

一、陸軍省の支那軍備増強の意向を
陸軍省の支那軍備増強の意向を

六月廿七日 陰

一、陸軍省の支那軍備増強の意向を
陸軍省の支那軍備増強の意向を

一、陸軍省の支那軍備増強の意向を
陸軍省の支那軍備増強の意向を

一、弘道会事務所へ出席、三輪田、指原へ親族相統篇の義
及内談。

六月廿六日 陰 時々雨

一、今日九段坂上陸軍偕行社にて弘道会婦人部常集会ニ付
一時過出席、石塚左玄氏(陸軍薬剤監)の食物并調理法の
講話あり。頗る新説多し。乍併其言の果して真理に協ふ
や否ハ容易ニ断言し難し。

一、一昨廿四日ハ六元老(伊藤、井上、山縣、黒田、西郷、大
山)を召せられ御前会議を開かれ、昨廿五日も又御前会
議あり。昨日午後四時ニ至り伊藤総理大臣ハ辞表を呈し、
併勲位栄爵をも辞す。夜中伊藤侯より大隈、板垣両伯を
帝国ホテルニ招きて会见し、政府を両氏に譲ることを述
ぶ。

*原文は「六大臣」であつたのを「六元老」と書きなおしてい
る。

六月廿七日 陰

一、昨朝兩伯会合し、憲政党総務委員とも相談し、内閣引
受の事を決し、伊藤に其返事を出す。

六月廿八日 陰 時々雨

一、昨日大隈、板垣兩伯御召ニ依て参内、聖上より内閣組
織の勅諭を賜はる。

六月廿九日 晴

一、去廿六日の大雨にて石川県、富山県、岐阜県等出水、

被害頗る多き電報達せり。

六月三十日 晴 暑八十八度

一、今日午前十時於宮中親任式ありたり。

任内閣総理大臣

大隈重信

兼外務大臣

任内務大臣

板垣退助

任農商務大臣

大石正己

任文部大臣

尾崎行雄

任大蔵大臣

松田正久

任司法大臣

大東義徹

任逓信大臣

林有造

是にて全く政党内閣となれり。但陸軍大臣桂太郎、海軍大臣西郷従道ハ旧内閣已来其儘留任す。

一、同日、内閣総理大臣伊藤博文、大蔵大臣井上馨、内務大臣芳川顕正、外務大臣西徳次郎、司法大臣曾根荒助、

通信大臣末松謙澄、農商務大臣金子堅太郎、文部大臣外

山正一、何れも依願本官を免ぜらる。

七月一日 晴

一、昨日より暑氣大ニ増し、昨日ハ寒暖計八十八度、今日午後ハ九十二度ニ昇る。

七月二日 晴風

一、今日弘道会四谷部会開会ニ付、同所松平伯爵(直亮)

氏邸ニ参る。会員八十余名参集、細川潤二郎及び余道徳

の講話をなす。洋食の馳走に相成、夜八時過帰宅。

*ほそかわじゅんじろう 法制学者、教育家。泊翁免官のあとを承けて華族女学校長となつた。東京女高師校長、学習院長もつとめた。貴族院議員、枢密顧問官、東宮大夫も歴任。

(一九三四)

七月三日 陰 日曜 風

一、弘道会事務所へ出勤、掃掛銅盤の鳩の置物を購入す。

七月四日 朝大雨 夫より風

七月五日 晴

一、恩給金七、八、九三ヶ月分請取。

七月六日 陰

一、曾我祐保大阪より来問す。酒飯出し候。

一、鈴木光成台湾より帰り、西萩米、果物、錯鉄、干葡萄

被贈候。

七月七日 朝風雨 午後風

一、第一高等学校生徒卒業授与式ニ付同校へ出席。

一、神田孝平氏久々病氣(九年間)の処昨五日遂に卒去す。

依て弔として同家へ参り、為香奠金三円を賻す。

一、津田長人久々病氣の処養生不相叶今日致死去の趣。

一、篠原於たみ大病の趣申来ルニ付直新十郎遣ス。熱度

高底有之、余程危篤の趣なり。

七月八日 晴

一、中條精一郎、葭江同道にて来ル。同人昨日大学にて工

科卒業試験相済の趣。

一、今朝篠原へ為見舞猶又新十郎遣し、玉子一円丈為見舞為持遣ス。先容体ハ昨日と同様のよし。

一、菅治兵衛氏来ル。十七日同地出張の打合せ致す。

*すがじへえ 千葉県匝瑳郡匝瑳第三支会長。旧樺海村に作新学院(はじめの「作新精舎」)を創設した。菅宛の泊翁書簡は『弘道』第九三五〜六号参照。

七月五日 薄晴

一、今日津田長人葬送ニ付、為名代新十郎遣ス。寺ハ日暮里青雲寺なり。

一、午後弘道会事務所へ出席、帰掛古観音像一体購入す。代価三円七十銭なり。

一、東葛飾郡千代田村寺島雄太郎来ル。去年^{しんたゐ}認遣したる報効碑の石摺并為謝礼流山味琳式瓶持参。

七月十日 晴

一、午後より学士会院へ出席、蕃妾論の一題を講話す。

七月十一日 晴

一、於ちか墓参ニ付、金三円隣祥院へ遣ス。

七月十二日 晴 夜雷雨

一、上田由之助死去の趣申来ル。香奠金壹円遣ス。

七月十三日 晴

一、松平直亮伯来ル。弘道会の義ニ付種々依頼有之。

一、萩谷勇吉来ル。弘道会の為種々意見申述候。

一、去八日より魯国皇族東京へ逗留の処、昨日退京帰艦相成。

七月十四日 晴

一、隣祥院へ墓参。

一、森田莊蔵、萩谷勇吉の二人弘道会拡張の義ニ付見込申述候。

七月十五日 晴

一、中條精一郎夫妻来ル。文部省へ就官の都合の由申聞候。

七月十六日 晴

一、午後より弘道会事務所へ出席。

一、豊和支会長寺本省三郎為出迎上京。

一、佐倉士族木川直、丹治重高の式人上京、昨年政府発令の旨趣により旧佐倉士族俸祿の誤謬に付きて改正の義を出願せん為め相談ニ及ぶ。

七月十七日 晴

一、朝六時発本所発の汽車にて豊和支会へ出張、幹事北沢正誠随行ス。寺本省三郎及菅治兵衛本所より同行ス。豊和村字飯塚ニ着し、会員菅谷忠三郎の宅に休息し、午後二時より同村小学校にて道德の講話をなす。匝瑳、吉田の支会員も出席ス。菅谷氏ニ宿す。

七月十八日 晴

一、七時頃出立、樺海村菅氏の宅へ立寄、十時八日市場発の汽車にて午後二時過帰宅。

一、土方久元氏嫡男元明氏去十五日自殺せし由にて、今日埋葬なり。余不在ニ付、執事小林新十郎を名代として遣はす。

七月十九日 晴

七月二十日 晴 夕遠雷

一、今朝土用入ニ付御所へ参内

兩陛下え天機相同、夫より花御殿え参上

皇太子殿下え同様相同。

一、新潟県女子服部富美といふもの忠孝修道会の創立の遊説員として来訪。

七月廿一日 晴

一、中條精一郎文部省嘱托員を命ぜられ、年俸金千円下賜の旨通知有之。

七月廿二日 晴風 暑強

七月廿三日 晴 暑

七月廿四日 晴 日曜

一、午後一時より弘道会事務所へ出席、夕刻帰宅。

七月廿五日 晴

一、清水賢治来る、菓子一箱持参。

七月廿六日 晴

七月廿七日 晴

一、松平直亮伯より暑中見舞として使者を以て温飴一巴被

贈。

七月廿七日 晴

一、依田百川来ル。佐倉士族家祿請願の義ニ付及相談。

*よだひやくせん 演劇評論家。号は学海。佐倉藩士で、藩の儒官となり、要職に進んだ。維新後、修士局編輯官、地方官會議書記を歴任。辞職後演劇改良を企図し、時代狂言の荒唐奇稽を正そうとした。(一八三三—一九〇九)

七月廿八日 晴風

一、金子幸次郎死去ニ付為香奠金三円遣ス。

七月廿九日 晴

七月三十日 晴

一、本年ハ入暑以来連日の快晴にて米作ハ宜敷方なれども、早魃の土地あり、暑氣甚強く午後ハ撰子九十一、二度に昇る。併し夜中ハ涼風あり。

一、弘道会事務所へ出席。

一、三河国へ旅行御暇願濟ニ付明後一日出立の届書宮内省へ出す。

七月三十一日 晴

一、木内直来る。佐倉士族家祿の事相談。

(本会理事・東京大学名誉教授・国際武道大学名誉教授)

(48)

壇俳道弘



選るしげ塚篠

千葉県 鈴木とよ女

○いたわれ吊橋渡る青葉山

○夕霧に利根をへだてて工教の灯

水郷の暮れて蛙の夜となれり

梅雨晴間まわし通しの洗濯機

島根県 小玉 光

◎起きぬけの雨の洗ひし躑躅かな

(評) 作者が朝の起きぬけにふり出した雨が見る／＼うちに洗っておとしてくれ、すっきりとつつじの色がきれいなったというのである。起きぬけというのが面白い。

選者近詠

○行春や疎遠となりし人あまた

瓶の花一茎高く夏に入る

○茶話のはずむ縁先

顔ぢゆうを口にして啼く燕の子

○久々の客あらはるる更衣

鍵ッ子によその矢車鳴るばかり

○熱き茶を客にもてなす梅雨入かな

メーデーや迂回標示に腹立たず

一坪の畑打ちかね懇ひをり

婦人部鴨川交流会について

平成二年度安房支会の婦人部鴨川交流会についてお知らせします。

本年度安房支会の専門部重点活動として一つは読書会があり、「西村茂樹」高橋昌郎著）もう一つに婦人部の交流会がありました。

去る六月三十日（土）午後一時に館山地区の婦人部会員と支会長・事務局七名は鴨川へとむかいました。

最近完成した鴨川民族資料館には、館長さんはじめ鴨川地区の婦人が迎えてくれました。早速挨拶と館内説明・参観となりました。

普段、こうした機会がないので展示品に驚きの声や感嘆の会話があちこちできかれました。すぐ隣の市立図書館では静寂の中コンピューター導入のシステムに感心させられました。

その後気分を一転、一戦場公園にでかけ展望台から半円の水平線を望み、広々とした景観に日頃の多忙を忘れのびのびとした気分になったものでした。

そのあと、市営のフラワーセンターの花に埋まりすばら

しい一時をすごし最後にレストランで茶話会をもちました。

鴨川市の文化的・観光資源開発を各面から見学することができ、鴨川市の発展に感動したのでした。そしてこの交流会も予想以上に暖かい雰囲気終始し有意義だったとお互いに喜び合いました。

安房支会長（安田豊作）の構想の中に、組織の活性化は、各専門部の活動・わけても青年部・婦人部を生かした活動が必要であるというのがありました。このことから鴨川地区の女性会員開拓の意味で今回の事業が実施されたわけです。

こうした交流は、いつもの職場の空気や人間関係と全く違う場と人によって新しいものが生まれる機会となることです。弘道会会員をふやす目的もさることながら、豊かな環境の中でゆったりした時をすごせたという和やかさがなによりでした。もちろん弘道会についても大いに語られましたが、今後こうした活動を通じ交流を重ね、広い視野と相互理解を深めていきたいと考えています。

読書会とあいまって、ますます多様な活動を目指したいと思っております。

（安房支会事務局）

支会だより

千葉県安房支会

事務局 往来

(抄録)

5月30日(水)

*十六年間の永きにわたり、本会発展のためにご尽力された渡辺薫事務局長が、本年度満八十歳になられたのを機に、5月31日付にて勇退されることになった。この日は、鈴木会長より渡辺事務局長に対して、ねぎらいと温かい励ましの言葉があった。

6月1日(金)

*本日付をもって事務局長に任命された藤下昌信に対して、辞令が交付された。

*午後2時より、一一〇年史編集委員会(囑託と事務局職員によって構成)が開かれた。協議内容は次の通り。

①編集委員会の開催期日。②今後の調査事項。③年表の作成。④その他

出席者は、渡辺薫氏(理事) 望月兼次郎氏(元静岡県立静岡東高等学校長) 古垣光一氏(国士館大学講師)……以上三氏は本会囑託……と藤下昌信局長。

6月7日(木)

6月12日(火)

*本年度の総会において寿昌され、当日ご病気のため欠席された石井千明理事宅(杉並区上井草)を訪問。(渡辺理事と藤下) 寿昌状と寿昌杯をお渡しする。

*午前11時、「日本道徳界の偉人西村茂樹」と題する記事を書いて下さった『世界思想』編集部近藤泰宏氏が来会。掲載誌『世界思想』第7号八冊の寄贈を受く。
*午前11時30分より、一一〇年史編集委員会を開く。主として

①今後の調査事項。②出版要領、出版計画の確認。について協議。出席者(渡辺、望月、古垣氏と藤下)

6月13日(水)

*藤下事務局長、栃木県佐野市の郷土博物館へ。企画展「堀田氏と佐野藩領」を見学。一一〇年史関係史料を収集。終って来館中の堀田正博氏(旧佐野藩主の後裔)を囲み、松島武彦館長、石田正巳学芸係長と懇談。

7月6日(金)

*午後2時より、一一〇年史編集委員会を開く。

①橋本孫一郎関係調査報告。②佐野藩時代の会祖関係調査報告。③今後の調査事項。

について報告・協議を行った。出席者(渡辺、望月、古垣氏と藤下)

7月11日(水)

*有田支会幹事古田實氏来会。前支会会長金ヶ江三郎雅綱氏病氣療養のため辞任。後任に深川明氏(深川製磁株式会社・取締役社長)が就任、とのご報告あり。

7月16日(月)

*有田支会会長深川明氏ご挨拶のため来会。種々懇談する。

7月26日(木)

*定例役員会(於会議室)

鈴木勲会長が議長となり、次の事項につき協議と報告を行った。

1、協議事項

●平成2年度主要行事に関する件。

①月例役員会について。②研修旅行について。(ご

案内は、編集後記の上段に記載)

③支会協議会

10・23・(火) 各支会の支会長及び幹部役員の参

集を得て行う。

④特別講演会

11月22日(木) 講師未定。

⑤「西村茂樹研究論文」の募集。⑥泊翁研究会(日記を読む会)の開催。⑦道徳教育研究団体への助成。

⑧その他(省略)

2、報告事項

●一一〇年史編さん事業の経過報告。

出席者(鈴木勲会長、石井千明、大槻文平、寛素彦、土田國保、古川哲史、堀田正久各理事。生平幸立監事。事務局(藤下昌信、風間一彦))

*役員会終了後、時局談話会を開く。

講師 木屋野正勝氏(読売新聞調査研究部主任研究員)

演題 「日米構造協議の背景にあるもの」

7月27日(金)

*午前11時より、一一〇年史執筆者会議を開く。次の事項について報告、協議を行った。

1、報告事項

①佐野市郷土博物館の会祖関係資料収集。②城東支会長橋本孫一郎関係資料収集。

2、協議事項

①執筆上の問題点。②今後の調査事項。

3、連絡事項

①内容構成と執筆分担の確認。②出版要領の確認。

出席者は、鈴木勲会長、古川哲史理事(東京大学名誉教

授)土屋好重氏(元横浜市立大学教授)高橋昌郎氏(清泉

女子大学教授)今井淳氏(武蔵大学教授)望月兼次郎氏、

古垣光一氏、藤下昌信、風間一彦。

7月30日(月)

藤下局長、文部省へ。(定例報告書提出)

会告

●圖書「寄贈者芳名

(平成2年6月～平成2年7月)

『佐野の歴史』

発行者 佐野市郷土博物館

佐野市郷土博物館殿 (栃木県)

『堀田氏と佐野藩領』

発行者 佐野市郷土博物館

佐野市郷土博物館殿 (栃木県)

『佐野市郷土博物館概要』

発行者 佐野市郷土博物館

佐野市郷土博物館殿 (栃木県)

『佐野市郷土博物館年報 昭和63年度』

発行者 佐野市郷土博物館

佐野市郷土博物館殿 (栃木県)

『佐野市史 通史編 上巻』

編集 佐野市史編さん委員会

発行 佐野市

佐野市郷土博物館殿 (栃木県)

『佐野市史 通史編 下巻』

編集 佐野市史編さん委員会

発行 佐野市

佐野市郷土博物館殿 (栃木県)

『佐野市史年表』

編集 佐野市史編さん委員会

発行 佐野市

佐野市郷土博物館殿 (栃木県)

『日建設計の歴史』

一九〇〇—一九九〇』

編集 「日建設計の歴史

一九〇〇—一九九〇』

編集室

発行 ㈱ 日建設計

㈱ 日建設計 殿 (東京都)

〔秋田県〕

渡部 文雄(2)

〔岩手県〕

遠藤 栄一(2)

〔千葉県〕

池上 巖(2)

林 秀雄(2)

八千代支会 (112名分) (2)

三橋金次郎(1)
飯田寅次郎(3)

〔岐阜県〕

長谷川泰典(4)

〔愛知県〕

中島 敏啓(2)

〔兵庫県〕

吉岡 篤三(3)

〔島根県〕

松江支会 (13名分) (1)

◎会費領収報告書

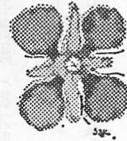
(自平成2年6月1日
至平成2年7月31日)

1、この報告を以って領収書に代えさせていただきます。

2、お名前の下の数字は会費最終年度です。

言葉の

ひろば



岩崎 晶

作って毎朝の膳に備え、手のひら上の人形のすげ笠の中に米粒を自ら食する以前に恭しく置いたと云うお話は今時の小・中学生に訓ずる必要あり、私は子供の頃「ごはん粒を茶碗に一粒たりとも残すと目がつぶれますよ」と言われ、肝に命じております。

○第八十八回総会の折、「天皇陛下と日本弘道会の弥栄を祈念して」万歳三唱を不肖私が音頭を取りましたが、うしろの評議員席に座っておられた加藤嘉三郎氏が「君！万才の声が小さかったよ」と叱声されました。誠に至らざりしことと、謹んでお詫び申し上げます。
(本会評議員)

東京都 北原 隆

謹啓 紫陽花の美しい季節でございます。鈴木様におかれましては、益々御清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、鈴木様から三月にお手紙を頂いておきながら、お返事が遅

くなりまして、大変失礼いたしました。ヨーロッパへ出張しておりました為、帰国してから拝見させていただきます。

鈴木様の、「弘道」での記事を読ませていただきましたが、深い感動を覚えました。二週間程前から、読売新聞に連載されている「新しい隣人 外国人労働者問題を考える」を読みながら、鈴木様の記事を思い起こし、「持てる福祉、経済、技術、文化を世界の人々と分かち合うことを国家の理想として堅持すること」の大切さを感じております。

鈴木様の一層のご活躍を心よりお祈り申し上げます。 敬白

鈴木 勲様

(上智大学生命科学研究所)

千葉県 高梨 武夫

暑中御見舞申し上げます。

先年度は弘道会本部を訪問させて戴

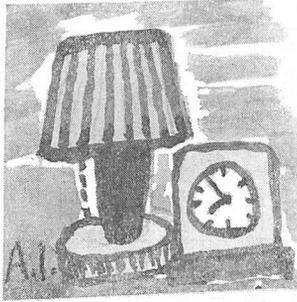
○第八十八回通常総会の「懇談の部」に於ける寛素彦理事の発言「……マッカーサーとの会見の折に陛下は（自分がすべての責任を負う）と仰言ったので元帥はハッとして傲慢なる態度を改めたという事実がある。それを何んぞや長崎市長はいやしくも地方公共団体の長たるものが、しかも陛下のご病氣中にごこのような責任問題について発言するのは誠にけしからん。遺憾である。」と。正に私は双手を挙げて賛意を表する次第であります。

○農は国の基也。水戸黄門が農人形を

き多大な御世話御指導を賜わり且貴重な書籍までいただき誠に有難く厚く御礼申上げます。

どの書物も現代並びに将来の日本の歩むべき大切な指標を示すもので極めて有意義でありました。厚く御礼申し上げますとともに会長先生の益々御健勝と弘道会の大きいなるご発展をお祈りします。

盛 夏



反響

東京都 岩崎 晶

第九四五号の感想を申し上げます。

開巻冒頭の西村茂樹翁の筆になる「将

軍家の御成」については、今昔の感ありであります。会祖の文に依りますれば、江戸時代には將軍家が諸大小各の藩邸の前を通過する時には、晴天時は勿論、雨降り直後でもその水溜ある泥土に座し(藩主は砂を播きし上に)やうしろに、重臣たる茂樹翁は熨斗目、麻上下で、両刀を帯して平伏すると云う。頭をじゆうぶんに地面に着け、行列が通過する迄頭を上げること不可能である。「頭挙げ」の差図があつて初めて頭を挙げてみれば將軍の興はもはや遙かかた。將軍すら封建時代には斯くの如し。

況んや一天万乗の君は現今の如く容易く宮廷を出ずる事なく、ご真影(写真技術など末だなく)にさえ相まみゆること能わず、名実共に神に近しのご存在であつたのである。

それがどうでしょう。現代では陛下が園遊会にて一米近く迄に顔をお近付けになり、並列者に一々頷いておられるお姿をTVで微笑く拝見するのであ

ります。茶の間に迄浸透した次第。昭和天皇はオリンピックにて優勝したる柔道選手の前にて「柔道は骨が折れますか?」と質問され、選手は慌てゝ曰く「柔道はまことに骨が折れます」と。園遊会に招かれたる周辺の人々は口を開けて笑い、その様手に取るが如し。私もTV画面に接して釣られて朗に笑いました。又、昭和天皇が終戦直後の日本全国周遊のご旅行の都度、各地に於て庶民群衆の中でもみ苦茶に取り囲まれておられる御写真を新聞紙上に屢々拝見して日本もヨーロッパ並みの皇室の姿に近付いたかなと認識しました。

先般の礼の宮ご婚儀に際してのお二人の御むつまじきお姿のスナップ写真は好評であります。開かれたる皇室に對して感深しでございます。

次、農業問題―テーマは時宜に適合てまことによろしい、と存じました。

地中海文明やメソポタミア文明も、土地が劣化し減じた。ローマ帝国の滅亡も、支配圏を拡張すぎた結果、食料

自給というシステムを軽視してしまつたことに起因する。日本民族は本質的に農業民族である。水田はダムの三倍の貯水能力がある。日本の水資源サイクルのかなめとなっている。食の独自性を放棄することは、民族の文化の独自性を放棄することと同じ意味をもっている。

以上は鈴木勲会長の紹介による小島慶三氏著「文明としての農業」の抄文であります。蓋し至言であります。

「日本農業を憂える」武田邦太郎氏の論旨は「老世代はすでに農作業する体力を失い、荒廃しつゝある農地が目立つようになっている」又、菅谷栄夫氏の考察にも「農家後継者不足と農家の嫁不足」を案じておられます。心配であります。

佐倉市「兼坂祐氏」の大型水田での試み、石渡敬氏の紹介文と古田紹欽氏の「日本農業への身辺的発言」は共に具体的で暗示に富み貴重なるご意見であります。

次、東大名誉教授・中村元博士の「東洋の思想と道徳」を私は弘道会8Fの講堂にて具に前列にて拝聴いたしました。松江支会に於て明治三十年秋、西村会祖が講演をされておられることに言及されています。このことは、古川哲史本会理事の「泊翁日記」(三)にも詳細に地図入りにて山陰地方巡回、各所に於て会祖が講話をされているのが明解出来ませう。

中村元名誉教授は「道徳学の樹立」「世教の立場」「聖徳太子による世教」「道徳の標準」「宗教・リリージョン」「道徳学の普遍性」「道徳をひろめる段階」「国の問題」「慈悲の精神」「未来に向つて」と論旨を進められ、結びとして機械文明の発展の結果、生きとし生けるものにひろく愛情を及ぼすというのを改めて見直さなければならぬと論じておられます。まことに有意義なるお説話でありました。

茲に些か卑見を述べさせて頂きます。江戸時代は、士(武士・学者・医者・神官・僧侶等)農(お百姓さん)工(大工・左官・石工等匠)商(商人)とランクづけされていた模様ですが、現今では、やゝ商(経済・金融・実業界)士(政治家・官公吏・学者・マスコミ関係)工(建設業)農(農耕者)の様相を呈して参りました。これは少々危険なる国の姿にて、私に云わしむれば憲法第十三条により、「すべての国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」とあり、全ての国民は法の下に平等であると第十四条にもうたつております。国民のランクづけはいけません。全てが並列で持場・持場で励んで幸福を追求いたしましたしよう。

以上

(本会評議員)

研修旅行のご案内

- 一、日 時
十月五日(金)
 - 二、見学先
千葉県木更津方面
 - ①証成寺 ②金鈴塚資料館
③上総博物館
 - 三、交通機関
大型バス一台
 - 四、集合場所と時間
東京駅丸の内側(旧丸ビル明治屋横)
 - 午前八時二十分(時間厳守)
 - 五、帰着時間
午後六時(東京駅八重洲口)
 - 六、参加費
一名につき一、〇〇〇円
(昼食は、本会にて用意)
 - 七、申込み
ハガキに住所、氏名、電話番号を記入、九月二十五日(火)までにお申込み下さい。
- *多数のご参加をお待ちしております。

編集後記

●立秋を過ぎたとはいえ、例年にも増して猛暑の毎日が続いております。会員の皆さま方にはいかがお過ごしでしょうか。コンクリート・ジャングルに囲まれた東京の暑さはまた格別です。お手許に銷夏縁陰号をお届けいたします。本号の特集テーマを「私の愛読書」といたし、たくさんの方々からエッセイをお寄せいただきました。心の糧として愛読して来られた書物への、それぞれの憶いが紙面に躍動しております。執筆者の皆様有難うございました。

●去る七月二十六日(木)に開催された定例役員会の終了後、読売新聞調査研究部主任研究員の木屋野正勝氏をお招きして、時局談話会を開催いたしました。演題を「日米構造協議の背景にあるもの」とし、構造協議のバック・グラウンドについて、最新の情報をもとにした貴重なお話を拝聴いたしました。この要旨は、次号(9・10月号)に

掲載いたしますのでご期待下さい。

●このほど、厚生省が「簡易生命表」(昨年十月現在)を発表いたしました。昨年に生れた赤ちゃんが何歳まで生きられるか、という「平均寿命」は、男が七五・九一歳、女が八一・七七歳、過去最高を記録、依然として世界一の座を守り続けているとのこと、誠に喜ぶべきことですが、今後益々高齢化社会に関する論議が、活潑になるのは必至です。永い年月を懸命に生き、限りなく社会に貢献して来た方々が、自分たちの築き上げた豊かさを享受できず、不安に曝されるような世の中であってはならないと思います。(藤下記)

平成二年八月天日 印刷 実価 二五〇円
平成二年八月三日 発行 年会費 一五〇〇円

編集兼 鈴木 勲
印刷所 共立社印刷所
東京都千代田区神田神保町三ノ一〇
東京都千代田区西神田三十一六

発行所 法人 日本弘道会
電話 〇三(二六)〇〇〇九番
郵便番号 東京四一四三二一七
FAX 〇三(二八)〇九五六

第一法規

有光次郎日記

〔昭和2年〜23年〕
楠山三香男 編集

★A5判・上製・函入・グラビア4頁・本文1,304頁・定価20,000円(税込)全460円

戦前、戦中、戦後を通じて克明な日記を綴り続けた文部高官・有光次郎——その膨大な日記群から、公務関係についての詳細な叙述すべてを、有光自身の校訂を経て原文通り公刊する。

教育行政史、社会教育史、さらに我が国の近現代史——とりわけ昭和10〜20年代——の史料状況に大きな画期をもたらすものとして、各界の関係者からその公開が待たれていた貴重な記録である。

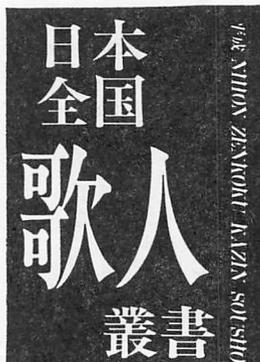
歴史の空隙をうめる新資料！率直、克明に刻まれた昭和の軌轍！！

(発行所)

〒107 東京都港区南青山2-11-17

第一法規

TEL (03) 404-2251



古川哲史集

B六判 九六頁
定価一、八〇〇円
(〒三五〇円)

53

肥前路

第一歌集『波がしら』、第三歌集『東西抄』につづく著者の第四歌集。『東西抄』以後の外遊詠と最近までの日常詠を集め、著者が選歌を担当している『弘道』誌の選者詠をも収める。

日本弘道会でもお取り次ぎいたします。その場合、送料はサービスとなります。

(発行所)

〒112 東京都文京区音羽1-15-12-3121

(株) 近代文芸社

TEL 03-942-0869 振替東京 7-68875